
アタシがアンタの自殺を止めます！！

ある日のあひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アタシがアンタの自殺を止めます！！

【Zコード】

N3033Y

【作者名】

ある日のあひる

【あらすじ】

生きる目標無し、人生に意味なんて無い。世界はくだらないと思っている高校一年生、夢谷信哉。その前に現れた、自殺願望が感じ取れる能力を持つた女の子、時田可憐に、銃を向けられ人生最大の衝撃的な？出会いをする。はたして信哉はこれからどうなるのか？ 可憐の目的は！？

第一話 出会い。（前書き）

感想、アドバイス、気になる点、気軽にお願いします

第一話 出会い。

今は、桜の舞う季節、窓の外に田をやれば、校庭にある桜の木が花びらを散らしている。

俺は、ただの県立高校に入学した。別に高校に興味が在った訳じやないが、働くのは、嫌だったからだ。今日は、入学式の次の日、一時間目、内容は、ホームルーム。右はじから、順番に自己紹介の真っ最中だ。

「 です。よろしくお願ひします」

俺の前の席に座る、女子まで順番が回り、教室の左奥、つまり一番最期の俺の番に回つて来た。

「 次」

担任の三十歳位の男に促され、俺は、立ち上がり自己紹介を始めた。

はあ～次は、俺か、ここは、普通に流しておくか。

「 はい 夢谷 信哉 趣味なし 特技なし よろしくお願ひします」

周りの反応は、とくに何も無い。そりやそつだ、今の自己紹介には、気を引くモノが何もないのだから。

そして、自己紹介も終わり、何事も無く、その日の学校が終わり、俺は、上履きを脱ぎ靴に履き替え、校門へと向かつて歩く。俺の事なんか誰一人覚えて無いだろうな、まつ、友達なんか要らないけどな。はあ～ぐだらない世界だ。

「 死にて～」

俺は、『その』な言葉を口にした。今思えば、その言葉がアイツを動かしたのかもしない。

「 やっぱり ちよつと… 夢谷信哉…」

俺の背後から、俺の名前を呼ぶ元気の良い女の声がした。そして

俺は後ろを振り向くと、

「あつ？」

「あぐつ！？」

そこに居たのは、美少女と言つても、おかしくは無い、女子が居たが、その行動は、まるで『やくざ』のようだつた。その女子は、俺が振り向いたら、いきなり、右手を伸ばし、俺の口に拳銃のようなモノをツツコミやがつた。

なんだ、コイツは！？ 俺は頭の中は、まだ情報処理に追い付いていない。

「ふあ、ふあするんだ、ふいきなり（何するんだ、いきなり）」「

どよどよどよどよ

辺りに居た、数人の生徒が困惑している。

「ちょっと、アンタ達、騒がないでね、騒ぐと、穴が開くわよ」

「コイツは、残った左手で髪をかき分け、周りの生徒に怖い笑顔で言つた。

「さてと、夢谷信哉 アンタ死にたいんでしょ？」

俺に質問するコイツは、鋭い眼で俺の眼を見るがどこか、その眼は寂しげだつが、今は、そんな事を考えている場合じやない。一刻も早くこの状況から脱出したい。

「ふおつと（ちょっと）落ち着けつて、ビリふえ（ビリヰ）ソレ偽ものだろ、大人しく、口から離せ」

俺が喋らうとすると、舌に銃が触り、口の中に、なんとも言えない金属の味が広がる。

「偽物かどうか試してみる？」

「…………変わらない」

そしてコイツが右手の人差し指に力を入れた。

(パン!)

「…?」

「コイツが引き金を引くと乾いた音が辺り一帯に響き渡つた。そして、俺の口から銃を出すと銃口から、米国の星の入った旗が出ていた。

「もつと、本物ぽいの買えば良かつたかしら」

訳が分からねえ、何だこれは？ 新入生に対する、新手の儀式か？

「ふう～やっぱ偽モンか、それにしてもエアガンやガスガンだつたら、病院行きだぞ」

そしてコイツは、俺の腕を引っ張り、早足でその場から連れだそうとする。

「ちよつと、これからアタシに付き合こなさい！」

「何なんだ！？ お前は？ 一体何がしたいんだ？」

「お前じゅ無い、アタシは、時田 可憐よ！」
ひつして俺と可憐は、出逢つた。

へびく

第一話 出会い。（後書き）

感想、アドバイス、気になる点、気軽にお願いします

第一話 アタシの『能力』（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第一話 アタシの『能力』

俺は、学校から出ると、時田という奴に、近くの喫茶店に連れて行かれた。俺は、もつとヤバイ所にでも連れて行かれるかと思ったが、普通にウェイトレスが接客してくれる、よくありそうなチーン店のようだ。

「ご注文は、お決まりでしょうか?」

俺と時田と言う奴が席に着くと、すぐにウェイトレスの人¹が注文を聞きに来た。

「アタシは、カフェオレ、アンタは?」

「カプチーノ」

「はい、かしこまりました」
んで、飲み物が着き、俺は、一口カプチーノを飲み、学校での事を頭で少し整理し時田に話を切り出した。

「え~と、時田って言つたよな、さっきの学校でした事は、何だ? どうして俺を此処へ連れて來た?」

俺は、時田に向かつて質問をした筈だった。

「それより、アンタ死にたいの?」

質問に対しても質問で返すのか? コイツは、しかも何だこの質問は?

「質問に答えなさい、死にたいの? 死にたくないの? どっちなの?」

時田の口は、真剣だった、そして寂しげだった、だから俺は、今まで誰にも言わなかつた事を時田に言った。

「どうでもいいんだよ、死のうが、生きようが、この社会、世界は、くだらない。俺には生きる目標も、意味も持ち合わせて無い」

俺の話しを聞いた時田は、少し間を置き、俺に聞いて来た。

「アンタ、家族は？」

「小さい時に一人とも死んだよ」

「あんた『も』大変なのね。」

時田は、そう言つと、俺の顔を悲しそうな顔をして見ている。
「そんな顔で、俺を見るなよ。」

「えつ？」

「今、俺の事可哀そつな奴だと思つただる、そいつのが嫌いなんだ俺は」

「『めん、そんなつもりじゃあ……』」

そう言つと時田は、少し下を向いた、ただの頭がパーの奴ではないらしい。俺は少しほっとした。

「で、こつちの質問にも答えて貰おうか、さつきの学校でやつた事は、何だ？ イタズラにしちゃ度が過ぎるぞ」

「イタズラ何かじやない、アタシは、アンタが生きたいんだが、死にたいんだが分からなかつたから試しただけよ！」

時田は、初めて逢つた俺に対して、熱い口調で言つ。

「何で、初めて会つた俺にそんなに構うんだよ」

俺がそう聞くと、少し下を向いてから、顔を上げ口を開き答えた。
「信じてくれないかもしれないが、アタシは、ある能力が使えるんのよ……」

「能力？」

「うん、アタシの能力は、他人の『自殺願望』を感じとれるの」

「それは、余り便利とは言えない能力だな、でもおかしいだろ、俺から自殺願望が感じられたからって、あんな事をするか普通？」

「いや、違うの、アンタは、普通の自殺願望がある人と違う感じがして、なんて言つたらいいかしら、例えば、普通の人人が白だとしたら、自殺願望のある人は黒だとすると、アンタには、何もないのよ、色が無い、そんな、普通じゃない感覚を感じ取つたから、アンタが生きたいか死にたいのか、確かめようとしたの、結局アンタの感覚は変わらなかつたけど……」

成程、そう言う事が、色が無いか、あながち間違つて無いかもしれないな。

「別に信じてくれなくとも良いわよ、いきなり、こんな事を言われて、信じれる方がおかし」

話しかけている最中、時田は、窓の外を見て口を止めた。時田の目は、見開いて女の子追つ。

「ん？ どうした時田？」

時田の視線を追うとそこには、俺達の通つている制服を着た女子生徒が歩いていた。

「時田の知り合いか？」

「あの子、危ない、死ぬつもりだ、それもすぐに」

そう言つと時田は、立ち上がり、出口へ走つて行つた。周りに居た客も何事かと、俺達の方を見る。

「おい！ 待てよ、時田！」

「『めん、会計ヨロシク、アタシ行かなくちゃ！』

時田は、喫茶店を飛び出して行つた。

「釣りは要らない！」

「お客様！？」

千円札をレジに置き、俺も時田の後を追つて喫茶店を飛び出した。

つづく

第一話 アタシの『能力』（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第三話 遺れた頭脳（前書き）

感想、アドバイス、ヨロシクお願ひします。

第三話 隠れた頭脳

「おいでよ、時田！」

喫茶店を飛び出して行った、時田を追いかけ、時田の奴は、足が速く、中々追いかなかつたが

近くの交差点でキヨロキヨロしている、時田に俺は、追付いた。

「ああん、もう、見失つちゃつた！」

悔しそうな顔で、辺りを見渡す時田。

「何だ、さつき喫茶店の窓の横を通った女の子がこれから、自殺しようとしてるのでも、言つのか？」

俺は、時田のさきまでの言動と行動から推測して、時田に聞いた。

「ええ、そうよ、あの感じだとすぐこでも、自殺してしまうだつたわ」

「お前の能力つて奴で場所とか分かんないのか？」

「近くに居ないと、感じられないのよ、アンタも同じクラスで、近くで感じ取つたから分かつたの！」

あつ、コイツ、俺と同じクラスなのか、気付かなかつた。

「早くしないとあの子が……」

頭を抱えて地面に顔を向ける時田。俺は、さきまでのコイツの発言、通つた女子の状況を整理する事にした。

待て、考える、あの子は、これから自殺しようとしているんだよな。学校が終わつて、もう大分経つ、これから自殺するよう人がわざわざ入学式の次の日に学校へ来たと言つ事は、自殺の原因是、学校以外の何か？ 家庭か？ 家庭が原因なら、自宅で自殺する可能性は低い、時田は、今すぐにでも自殺してしまひそうと言つていた、

さつき喫茶店の横を通りた時は、手には何も持つていなかつた、て
事は、道具は使わないとことか、道具を使わない 飛び降り……
この辺りには高い建物は、無い。 車へ身投げ……死亡率が低い
どうせ死ぬなら、もつと確實に

「分かつた！ 時田コツチだ！！」

「えつ！ ちょっと！？」

俺は時田の腕を掴んで一目散にある場所へと走つた。

「分かつたって、何が分かつたのよ！？」

「さつきの子の居場所だよ、状況からして、場所は家じゃなく、道具の要らない、ここから徒歩で行ける場所で、死亡率の高い自殺と言つたら、踏切しかない！！」

（何、コイツ、さつきまでのあの情報だけで、場所を当てたの！？）

「今は、走れ！」

「はあ、はあ、はあ、はあはあ、はあ、はあはあはあ」

心拍数が上がる、脇腹が痛い、こんなに走るのは、いつ以来だろうか？ 去年の中学の体育祭でもこんなには走つていない。

そして俺達は、踏切から百メートル程の所まで来ると、踏切の近くに1人、制服を着た女の子が居る事を確認した。

「あれだわ！ きっとあの子よ！」

カン、カン、カン、カン、カン

女の子を見つけたが、まるで囮ったように踏切が鳴り始め、バーが降り始める。線路には、女の子が立っている。

「駄目！ 間にあわない！」

時田がそう叫ぶ声が、聞こえた。確かに今から俺がウサイン・ポルト並みに走れても間に合いそうもない。だが俺は、すぐそばの自販機に止まってあつた、黒いスタンダードなバイクを見つけた。

「おっさん… ちゅうと借ります！」

「お、おこ、坊主…？」

自販機の横でコーヒーを飲んでいた、おっさんのバイクにまたがり、俺は、アクセルを全開で、踏切へバイクをすつ飛ばして行った。左からは、もう目視出来る位に、踏切に電車は近づいている。

(ブオオオオオン…)

「くそおおおまにあええええ…！」

(バアギイ…)

「えつ…？」

バーを折つて、踏切の中へ入ると、俺は、涙を流して立っていた女の子を掴み、間一髪電車から避け踏切から逃げたが、上手く止まる事が出来ず、横転し女の子を庇つようにして転がった。

(ガロ、ガロ、ガロ、ガロ、ガロ…)

「痛てててててて」

(キィイイイイーーーーーーー)

俺達の事に気づき、踏切を通過してから電車は止まった。

「何してんだろう？ 僕…」

つづく

第三話 隠れた頭脳（後書き）

感想、アドバイス、ヨロシクお願ひします

第四話 助けた俺、止める彼女（前書き）

感想、アドバイス、ヨロシクお願ひします。

第四話 助けた俺、止める彼女

「何してんだろ？　俺……」

俺は、仰向けに女の子を抱きかかえ、日が暮れかかったの空を見て、呟いた。

「夢谷——大丈夫——！？」

俺の名前を呼びながら、時田が、俺の元に走つて來た。

「痛ててて、ああ、何とかな」

俺は、ゆっくりと女の子を地面に置き、傷ついた体を起こし立ち上がつた。

「その子は、大丈夫なの？」

「ああ、ちょっと氣絶しちやつたみたいだから、多分大丈夫だと思うけど、取りあえず、時田、救急車を」

「うん、分かった」

俺が頼むと、すぐ時田は、119番に携帯で連絡した。

「もしもし、救急車をお願いします場所は」

時田が救急車を呼んでいる時、俺は、女の子の手や足を見ると、あちらこちらに、変な『モノ』を見つけて。

「コレは……」

「うーん」

女の子が声を出し、少し体が動いた、俺は、女の子の体をさする。

「！？　おっ、おい、大丈夫か？　おい？　今、救急車を呼んだから、少し安静に」

「救急車！？」

女の子我に返つたような驚いた顔をして、急に立ち上がつた。

「だつ、大丈夫、私、怪我なんてしてないし、ぼーとしてて、間違つて、線路に出ちゃつて……」

女の子は、とても焦っている様子だった、俺の耳には、自殺の事を誤魔化そうとしているように見えた。

「じゃあ、おなじ二回目だね。」

そう叫びと女の子は、その場から、走り出した。

「待て！……ぐつ……！」

俺は、すぐ、追いかけようとしたが、さつき足を少し捻つたらしくすぐ走り出す事が出来なかつた。

「Nのよしとし」で向かう

時田が、携帯を切り、女の子を追いかけた。30メートル程走った所で、時田は女の子の腕を捕まえた。俺も少し遅れて、その場へ駆けつけた。

離して！私これから行かなきゃいけない所があるんだから」

女の子は必死に時田の腕を振り払おうとするが、時田は女の方へと子の腕をがつちり掴んで離そうとしなかった。

「！」

「別に自殺なんてしないわよ、わざのは、ぼーとしてて……」

「じゃあコレは何だ？」

俺は、女の子の腕を掴み制服の腕の裾をめぐらした。

「...」の左端

その腕には、青あざや
煙草の押しつけた火傷の跡などが腕に
ぱいに付いている。

「さつや、氣絶してゐる時に見つけたんだ」

רְבָעָה וְרִבְעָה

女の子はその場に泣き崩れた。

「病院には行きたくないの、警察にも言わないでお願い……」

「分かったわ、病院は、取りあえずいいわ、警察にも言わない、だから、これから私の家に来て、何があったか話してちょうだい。」
そう言つと、時田は、泣き崩れた女の子に右手を差し出した。
「アンタ、名前は？」

「……七尾 由実（ななお ゆみ）……」

「分かったわ、七尾由実、『アタシがアンタの自殺を止めます！』」

つづく

第四話 助けた俺、止める彼女（後書き）

感想、アドバイス、ヨロシクお願ひします

第五話 賴もしい電話（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第五話 頼もしい電話

それから、俺、時田、七尾さんの三人は、ここから近くに在ると
言ひ、時田の家に歩いて向かつた。

「時田、大丈夫なのか？」

「何が？」

「何がって事は無いだろ？……

「このままでいいのかよ？ 救急車呼んじましたんだろ？ 電車も
止めちつたし、俺、バイク、パクちゃつたし……」

「ああ、それなら、問題ないわ」

そう言うと時田は、携帯を取り出し、ある所へ電話をかけ始めた。

（ブルウ、ガチャヤ！）

「はい！」

早！ 時田が電話をかけるとすぐに、繋がり、元気の良い男の返
事が聞こえて来た。

「ああ、シゲル、アタシ」

どうやら、時田は、シゲルと言う奴と話しをしているらしい、俺
の耳には、時田の携帯からシゲルと言う奴の声も聞こえて来る。

「はい！ 何の御用ですか？ 可憐さん。」

「実は

これまでの大まかなあらすじを説明する、時田。

「分かりました！ もみ消せば良いんですね？」

「うん、そういう事、任せたわよ、シゲル。悪いわね」

「いいえ！ お任せ下さい！ じゃあ、すぐ取りかかります

そして携帯を切れた。俺は、聞いていた携帯の内容をもう一度確認した。

「もみ消す？ アレを？ ビツヤツて？ 正当な方法じゃ、無理だよな、となると……」

「おい、時田？」

「ん？ 何、夢谷。」

「今のシゲルって奴は、一体何者なんだ？」

俺がそう聞くと、時田は、俺の肩に手をのせ、笑顔で言った。
「夢谷君、世の中には、知らなくても良い事が、沢山在るのよ」「その知らない良い事を知っているお前はどうなんだ？ それを聞いた俺は、これ以上シゲルの事を聞くのをやめた。

そして、俺達が十分弱程歩くと、綺麗な外装の三階建のアパートに着いた。

「このアパートよ。」

時田が三階の一一番端の部屋の前へと案内する。

「ここがアタシの部屋よ、入つて。」

「ああ、お邪魔します。」

「お邪魔します。」

初めて入る、女子の部屋で、時田の部屋は、とても綺麗だったが、俺のイメージの女の子って感じはしなかった。

「取りあえず、お茶でも出すわね、テーブルに座つて」

俺と七尾さんは、お茶が来るまで、無言で待つている、友達が居ない俺に対して、この間は、ハッキリ言つて相当辛い。俺は何気なく部屋を見渡すとある『モノ』が目に入った。壁際に在った、本棚の上に在った写真立てに入っている写真だ、今の時田よりも幼い時

田が、同じくこの女の子と、笑顔で写真に写っていた。

「はい、お茶。」

「…？」

お茶を持ってきた、時田に写真を見ている事が気づかれると、時田は、お茶を置き、黙つて写真立てを写真が見えないように伏せた。どうやら余り他人には見せたくないモノらしい。

そして、時田は、何事も無かつたかのように、俺と、七尾さんの前に座り、話を切り出した。

つづく。

第五話 賴もしい電話（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第六話 秘密の天井裏（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第六話 秘密の天井裏

俺と、七尾さんとテープルを挟んで前に座り、話を切り出す時田。「七尾さん、どうして、自殺しようとしたの？ あつと、その傷と関係あるんでしょ？」

七尾さんの手を見てストレートに聞く時田。少し黙りこむ七尾さん。

「…………実は…………」

やつと七尾さんが固い口を開き始めた。

「この傷は、腕や足だけでじゃなくて、体中に沢山在るの……」

「誰にやられたの、そんな事を」

時田のその言葉のには、俺には、怒りのよつたなモノを感じられた。

「ぎ、義理のお父さん…………」

「母親は、どうしたんだ？ 黙つて見てるのか？」

俺が七尾さんに聞く。

「お母さんは1年前……私がまだ 高校に入学したばかりに病氣で死んじゃって……それより2年前にお母さんが再婚した義理のお父さんに殴られたりするようになつて、児童相談所や警察に話してもお父さん、そんなときだけ愛想良くて相談所の人人が帰つたらまた私を殴つて……もう耐えきれなくつて、さつき学校の友達に最初に会つてきて、それからあの踏切でもう死のうつて、楽になりたいの…………」

「やっぱり、児童相談所や警察は、使えないわね」

「組織で動いているから、行動が遅いんだよ、動くのは決まって何かが起こった時だ」

「すーはー」

時田は、深呼吸し、立ち上がり、テーブルに両手を思いつきり着いた。

「バン！！」

「七尾さん！ アナタ生きいの？ 生きたくないの？ 死にたいの？ 死にたくないの？ どっちなの！？」

時田の声が、部屋に響き渡つた、時田は、七尾の目を見て離さなかつた。俺は、そんな時田の目から離せなかつた。

「わっ、私は……死にたくない！ 生きたいです！…」

七尾さんの声も響いて、それを聞いた、時田は、こいつ言った。

「『消えたわね、自殺願望が』」

時田は、少し嬉しそうに口を笑つた。

「え？」

「じゃあ、アタシに任せなさい！ そのオヤジを何とかすれば良い訳ね、七尾さんにとつてそのオヤジは、居なくなつた方がいんじよ？」

「そうですが、無理だよ、あの人は、元ヤンキーで体も大きいし貴方じやとても……」

気遣つた口調で話す七尾さん。どうやら時田の事を心配しているらしい。まあ、それは、そうだろうな、今日初めて逢つた人に自分を助けてやると言われても、普通の人なら相手の事を気遣つてしまふのは当然の事だ。

「心配しないで私に考えがあるから、今の時間、そのオヤジは、家に居るの？」

「ええ、今……」

七尾さんは、時田の部屋に掛つていた時計を見た。

「今、七時を回った所だから、分家に居ます

「じゃあ、七尾さんの自宅の場所を教えて」

「はい」

そして七尾さんは、家の鍵と地図を書き時田に渡すと、時田は、台所からココア持つて来て、七尾さんに渡した。

「はい、七尾さん、少し寒いでしょ、温かいココア」

「あつ、ありがとう、時田さん」

「あと、七尾さん、そのオヤジは、右利き？ 左利き？」

時田が、ココアを飲んでいる、七尾さんに聞いた。

「右利きだけ、どうして？」

俺も七尾さんと、同じだった何故こんな事を聞くのかは分からなかつた。

「ちょっと、知りたかったのよ」

七尾さんがココアを飲んで少し経つと、七尾さんは眠ってしまった。

「ふう～やつと、薬が効いたわね」

「お前、ココアに睡眠薬でも入れたのか？」

「そうよ、自殺願望は消えたけど、アタシが帰つてくるまで、何があるか心配だからね。アンタ、結構、頭が回るわね、説明する手間が省けて助かるわ、七尾さんをベッドに寝かせといて」

言われた通り、俺は七尾さんをベッドに寝かせていくと、時田は、部屋の奥から脚立を持って来て、部屋の隅へと置き、上つて行つた。

「俺は、今、お前が何をしているのか、全く分からんが、これからどうするつもりだ？ 何か考えが在るらしげが、一体何をするつも

りだ?」

「よつと…」

「ガタ!」

「えつと、『レで良いかな?』

時田の部屋の隅の天井が正方形に外れると、時田は、そこから、ある『モノ』を取り出した。

「お前それ……」

「ああ、これね、『トカレフ』だけど、どうかしの?」

そういう言ひて、脚立の上から、『トカレフ』を俺に見せつける時田。

「どうかしたのじやあねーよ、何で、女子高校生のアパートの屋根裏から、カタギじやない方にポピュラーな銃が出てくんだよ……!」

「自分の身は、自分で護る、これは自然界の掟よ。」

何を言ひているんだコイツは!? この状況からしてマジで本物か? てか、さつき『レで良いかな?』とかてつてたよなコイツ、他にも、その屋根裏には、法律に引っかかりそうなモノが在ると言ひのつか!?

「ここは、日本だぞ! 銃刀法違反で捕まるぞ、お前!」

「大丈夫、大丈夫、心配ないわ、見つからなければ、捕まらないから

脚立から降りて、笑顔でにこやかに言ひ時田。駄目です、駄目ですか。おまわりさん此処です。

「お前、それで、七尾さんの義理の親父を殺すつもつじや無いだろうな」

俺は、マジで心配になってきた。

「殺しは、しないわよ、ただちょっと、手荒い事になるけど、アン

夕手伝ってくれる？この方法は、1人じゃ出来ないので、でも無理にとは言わないわ。」

時田は、真剣な口調と眼差しで俺に聞いた。

「分かったよ、手伝うよ、お前一人で行かせると、殺人事件として、明日の朝刊の一面を飾りそุดからな」

自分でも不思議だつた、俺がこんなに他人の為に動くなんて、自分で驚きだ。

「じゃあ、アンタの役割を説明するわね」

俺は、作戦の大体の流れを時田に説明され、必要な物を買い、俺と時田は、七尾さんの家に向かった。

第六話 秘密の天井裏（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第七話 クリーンヒット（前書き）

感想、アドバイス、ヨロシクお願ひします。

第七話 クリーンヒット

今、俺と時田は、七尾さんの家の前に来ている。俺の右手には、先ほどスポーツショップで買った来た金属バットが握られている。七尾さんの自宅は、住宅地に在る一戸建ての家で、明かりが付いていて、テレビの音も聞こえてくる、どうやら、七尾さんの義理の親父は、家中に居るらしい。

「いい？ 打ち合わせ通りよ、でも、ヤバくなつたらアンタは逃げなさい」

「ああ、考えとく、それより、上手く行くのか俺は心配なんだが」「心配しなくて良いわよ、人間、アンタが、思つていいよりも頑丈だから。」

そして、俺は、玄関のドアノブにそつと手をかけた、七尾さんから鍵を借りて來たが、その必要は無く、鍵は、開いていたので、俺と、時田は、ばれない様にそつと、家の中のテレビの音が鳴るリビングへと向かつて廊下を歩いた。

(ドックン、ドックン、ドックンドックン)

心臓が高鳴る、バットを持つた右手が震える。後少しでテレビの音が鳴るリビングと言つ所で、廊下のフローリングが鳴つてしまつた。

(ぎじつー)

「んつ！？ 由実、帰ってきたのか？ 今日は、帰つてくるのが遅いじゃねえか、飯の支度もしてねえし、これはお仕置きが必要か？」不気味な低い声が、家に響く、俺がリビングのドアを開け少し開けると、ソファーに座り、酒を飲んでいる、体の大きい男が居た。あいつだな、俺は、小さな声で、時田に言つた。

「じゃあ、行くぞ」

「うん」

ドアに手をかけ、俺は、心の中で、数を三つ数えた。

3
2
1
0 ! !

(大元)

卷之三

「！？ 何だ、このガキ！？」

俺は、オヤジに向かつて、バットを振り下ろすが、焦つていたせいか、外してしまった。バットなんか握るの何か久しぶりだし、ましてや、人に振り下ろすなんてどこぞのヤンキー漫画じや在るまいし初めてに決まつてゐる、外してしまつても、なんら不思議じや無い。（ビュツ！）

「くそ！」

俺の役目は、コイツを『氣絶させる事』、だから、俺は、もう一度バットを構えて、振り下ろそうとしたが、この親父は、テーブルに在つたビール瓶で、俺の頭を殴りつけた。

「ガシャーン！！」

- 8 -

ビール瓶は割れ、俺の頭に中身がかかる、そして俺は、痛さの余り、バットを手から離してしまった。

「カラン、カラン、カランカラン……」

もう一度、ビール瓶で俺を襲お

し込んで壁際まで、持っていた。

「ああ、ああ、ああ、ああ、ああ、ああ、ああ、ああ」

がオヤジ目がけ、振り下ろした。

「眠れこのブタ————！」

(ドオオン！—)

「ぐはつ」

(バタ！……)

時田が、振り下ろした、バットがオヤジの頭にクリーンヒットし、
鈍い音が部屋に響き、オヤジは、その場に倒れ込んだ。

つづく

第七話 クリーンヒット（後書き）

感想、アドバイス、ヨロシクお願ひします。

第八話 実現されるシナリオ（前書き）

感想アドバイス、お願いします。

第八話 実現されるシナリオ

時田が振り下ろした、バットが、頭に当たり、七尾さんの義理の親父は、その場に倒れ込みんだ。

(バタ!)

「痛ててて、このオヤジは、ちゃんと氣絶したのか?」

俺は、血が出ている頭を右手で押さえながら、時田に聞いた。

「ええ、いいトコロに入ったから、ちゃんと氣絶したみたいよ」

時田は、オヤジの口に手を当て確認しながら言つた。

「それより、アンタ、頭大丈夫? 結構、血が出てるわよ?」

「ああ、何とかな、少しふらつくが、大丈夫そうだ、それよりこれからどうするつもり何だ? この後の事は、まだ聞いて無いぞ」

俺は近くの壁に、背を付け寄りかかり、少し体を休めいる。

「そうだったわね、まだ、言つて無かつたわね

「ガサガサガサ!」

時田は、近くに在つた、タンスを開け、何かをしている、一体何をしているんだ? 探しものか?

「これで、良しと」

そして、時田タンスを閉め、立ち上がり、俺にこれからする事を説明し始めた。

「夢谷! これから、このオヤジをブタ箱に当分入れるから」

真面目な顔で、俺に話す時田。

「ブタ箱? 刑務所か、でも、どうやって? この状態で警察呼んだら、捕まるの俺らだぞ。」

「大丈夫よ、シナリオは、こう、私と七尾さんは、友達で、七尾さんに会いに、家に来たら、このオヤジに襲われ、その悲鳴を聞いて

駆けつけた、アンタがこのオヤジやつつけた。こんな感じよ。」

「確かに、シナリオにしては、まあまあ出来ているが、それだけじゃ、説得力に欠けるし、恐らく、実刑を食らつても、そう何年も刑務所に入つてられないんじやないか？」

「そこは、心配無い、ちゃんと、考へてあるわ、でもその前に」
時田は、携帯を取り出し、電話をかけ始めた。

「そろそろ、起きても良い頃だし」

「フルルル、フルルルル、フルルルル、ガチャー！」

「はい、七尾です。」

「せつあ、アパートを出る前に、番号を登録しといたの

「七尾さん、良きいて、これから」

俺から、少し離れて、話す時田、どうやら、これから辻褄合わせの打ち合わせをしてくるみたいだった。

「　　せつあ、上手く、合わせてね。」

「でも！　時田さん！」

「じゃ、後は、私に任せて」

「もう言つと、時田は、携帯を切つた。

「さてと、いい、「イツに着せる、罪状は、殺人未遂、銃刀法違反、それで、捕まれば、虐待の罪も調べられて、少なくとも、そうなれば実刑で、十年以上は、確定な筈。」

話しながら、時田は、ポケットから、ハンカチを取り出し、左肩から少し腕のところに行つた所をつくり縛り始めた。

「何をするつもりだ」

「アンタ言つたでしょ、『のままじや、説得力に欠けるって、確かにその通りよ』

時田は、七尾さんの義理のオヤジの元へ歩き、着くと、しゃがみこんだ。

「ふーはーふーはー」

深呼吸をする時田。

「だから、いづかるのよ」

「カチヤ」

「パアーンー！」

銃声が鳴つた、昼間学校で聞いた、玩具とは、を訳が違う、鼓膜を直接揺らされているような、そんな感覚がした。そして、俺が、時田を見ると、時田の一の腕から、出血していた。

「何してるんだお前！」

俺は、すぐ時田の元へ駆け寄つた、近づいてみると、気絶したオヤジの右手には、時田が持つてきた『トカレフ』が握られていた。「お前、自分で銃を握らせて、引き金を引いたのかー？」

「痛つ、へへ、これで、説得力は、バツチリでしょ、アンタ取りあえず、救急車と警察を呼んでちょうだい、これからは、シナリオ通りよ、今、七尾さんも、ロツチに向かってる筈だから」

「分かったよ」

俺は、すぐ携帯で、救急車と、警察を呼んだ。

「まつたく、馬鹿だろお前、何でそこまで！」

「はあ、はあ、はあ、バイクで電車に突つ込む奴に言われたくないわね」

「あつ、あれは、条件反射だ」

「アタシには、『目標』があるの、だから、自殺しようとしてる人は、止めるのよ……」

そう言つと、時田、意識を失い、数分経つと救急車が着き、俺も一緒に救急車に乗り病院に向かった。

つづく

第八話 実現されるシナリオ（後書き）

感想アドバイス、お願ひします

第九話
登校途中

(一) 二十一

卷之三

(ガチヤ!)

俺は、目覚まし時計を止め、起きた。今は、あのトンテモ無い新学期、初日から一週間経つ朝だ。アパートで独り暮らしをしてる俺は、朝の身支度を済ませ、いつも通り徒歩で学校へ向かった。あの後、救急車で運ばれた、俺と時田は、俺は、一泊の入院で済んだが、時田は、あれから学校へは、来ていない。まだ入院しているらしい、俺は、警察から多くの調書を受ける事になつたが、上手い具合に、時田のシナリオ通りに進み、七尾さんの義理のオヤジは、このまま行けば、懲役十二年程になる見通しだ、アイツが、タンスに『トカレフ』の弾を置いていき、言い逃れ出来ない状況になつている。まったく、御丁寧なこつた。

七尾さんも今は、安心して学校に通っている。俺に何度も礼を言
いに来てまいつていたが、七尾さんの笑顔が見れて、ほっとしてい
る俺も何故かあつた。

『アイツ』の事が気になっていた。俺は、全てが『アイツ』の考え方通りに事が進んだみたいだが、

「あの『バカ』は、大丈夫かな？」

俺がそう咳くと、俺の背後から、女の声かしてきた。

あの「力」とは
—体詰の事よ!—

卷之三

俺が振り向くと、そこには、制服を着た、時田可憐の姿が在った。
「ちゃんと、生きていたみたいね、夢谷 信哉！ 相変わらず、その変な感覚は、変わらないみたいだけど」「

「時田！お前もう大丈夫なのか？」

「当然よ、まだ少し痛むけど、ちゃんと軽傷になる場所を選んだんだから」「

そう言つと、時田は、腕の包帯を俺に見せた、俺の想像を遥かに超える元気ぶりだったので、俺は、安心した。

「それより、夢谷一 アンタからは、まだ自殺願望に似た感覚が感じられるから、それが無くなるよう、アタシが見てあげるから、これから覚悟しなさい」

「はあ？ ちょっと、どう言つて事だよ」

「いいいから、早く行かないと遅刻するわよー」

」の後、俺の携帯の電話帳の一一番上に『時田 可憐』が登録された。

つづく

第十話 中庭（前書き）

早、十話です。よんでいただき、ありがとうございます。

第十話 中庭

時田が、病院を退院して、学校へ来た初日、一時間目、現国。時田は、腕を枕代わりにして寝ていた。二時間目、三時間目も睡眠。四時間目の体育は、退院したばかりで、見学するかと思いつきや、怪我した腕をモノともせず、バスケットで活躍をしていた、どうやら運動神経は良いみたいだ。

あんな性格だが、コミニケーション能力はあるらしく、一週間、居なかつたとは思えないほど、たつた一日で、クラスに打ち解けている、俺とは大違いだ。

そして、俺が、昼休み、独り机で、コンビニで買ってきた、弁当を出そうとしていると、時田が俺の元にやって来て、話しかけ始めた。

「アンタ、それ持つてちょっと来なさい」

そう言って、俺の腕を掴み、教室から連れだした。

「おー、何処に、連れて行くんだよ」

時田のもう片方の手には、お弁当が掴まれていた。

「いいから、来なさい！」

そして、俺は、学校の中庭にあるベンチへと連れて行かれた。

「ここで、お昼を、食べるわよ！」

そう言つと、時田は、ベンチに腰掛ける。俺も仕方なくベンチに腰掛けた。

「何で、わざわざ、こんなトコでメシを食うんだ？」

俺は、弁当を開けながら、時田に聞いた。

「言つたでしょ、アンタからね、まだ自殺願望に似た感覚が感じられるから、それが無くなるよう、アタシが見るって」

俺は、時田が開けた、弁当を何気なく見ると、可愛い、手作り弁

当だった。

確かに、コイツ、アパートで独り暮らしだったよな、て、事は、この弁当、コイツが作つたのか？ 性格に似あわず器用だな。

俺と、時田は、飯を食いながら、話しを続ける。

「何で、お前は、そこまで、他人に構うんだ？ 俺が死んだって、お前には関係ないだろ。」

「アタシには『目標』が在るからよ、それに、アンタだつて、こないだ、七尾さんを助ける為に無茶をしてたじやない？」

確かに俺は、普段の自分では考えられないほどの無茶をした。

「今、落ち着いて考えると、よく分かんねーんだよ、何で俺が、他人の為にあんな事をしたのか、後、こないだも言つていたが、お前の目標つて一体何なんだ？」

俺が、そう聞くと、時田の箸が止まる。

「秘密……秘密よ、秘密！」

「なんだよそれ」

「それより、アンタ、休み時間ずっと一人で音楽なんて聞いてたけど、一週間もあって友達の一人も作つて無い訳？」

「別に、お前には、関係無いだろ、俺には、友達なんか要らないんだよ。」

「どうして？」

「秘密だ、秘密。」

それから少し経ち、お弁当を食べ終わった、時田が立ち上がり、少し前に歩き、振り向いて、俺を指差しこう言つた。

「アンタ、自分が思つてるよりも、きっと良い奴よ！ だから、早

くその変な感じを無くすようにしなさいよ！」

そう言つて時田は、校舎へと戻つて行つた。良い奴ね、お前が他人に言えるのか？

つづく

第十話 中庭（後書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第十一話 朝の迎え

時田が、退院してから、大分経ち、今は、五月の頭だ。俺が朝の身支度を終え、アパートの一階から、階段を降りている時、今日もやかましい声が聞こえて来た。

「大家さん、お早うござります！」

時田がアパートの前を簞で掃いている、一階に住んでいる大家のおばさんに向かつてあいさつをしていた。まったくあの元気は、一体どこから湧いてくるのか。

「あら、可憐ちゃん、おはよう、今日も元気ねえ」

「ええ、それが取り柄ですから」

笑顔で話をしている一人。いつの間にか、何年も住んでいる俺よりも、大家さんと親しくなっていた。

「おはようございます、大家さん」

階段を降りた、俺は、あいさつをしながら、少し頭を下げる。「あら、夢谷君、おはよう、夢谷君は、良いわね、こんな可愛い、彼女が毎日、迎えに来てくれて」

そう、時田は、退院してから、通学途中に在るからと言つて、毎日俺のアパートに寄つて来ていた。本当に勘弁してほしい。

「ちつ、違いますよ！ 彼女なんかじゃないですよ！ ジャア、学校に行きますので」

足早にアパートを去ろうとする俺。

「じゃあ、大家さん、行つてきまーす」

「行つてらつしゃーい。」

これが、ここ最近の俺の朝である。

学校に向かつて歩いている途中、俺から時田に向かつては、話し

かけは殆どしないが、時田は、俺に向かって、この登校中もそりが、学校でもよく話しかけてくる。

「アンタ、パソコンとか好きなの？」

今日は、こんな話題を振つて来た。

「別に好きつて訳じやない、何でそんな事を聞くんだ？」

実際の所は、パソコンは、俺の趣味だが、俺はめんじくさいので、あえてこう返した。

「だつて、こないだ、アパートに上がらして貰つた時、部屋にデスクトップと、ノートパソコンが在つたから、普通、独り暮らしじや、どつちかあれば、十分じやないの？」

上がらしてもらつた？ お前が無理やり上がつて來たんだろ？

！ たく、それに入部屋をじろじろ見やがつて。

「別に普通だよ、それに二つあつ方が便利なだけだ」

「ふうん、そうなんだ」

「あと、夢谷つて頭が良いんでしょ、クラスの同じ中学だった子が言つてたわよ学年トップにもなつた事あるんでしょ」

「コイツ、何俺の事探つてやがんだ。」

「アレは、たまたまだ、いつも、ヤマが当たつただけだ

「お前は、どこの中学校出身なんだ」

なんとなく、俺が時田に聞いてみたら、時田の足が止まり、一瞬、顔が引きつった。

「ん？ 時田？」

「アタシは、隣の県の中学校だから、アンタは、知らないわよ、小学校は、コッチだけど中学に入る前に隣の県に引っ越して、今年の三月の頭に、コッチに帰つて來たのよ。」

引きつった顔を直し、時田が答えた。どうやら、聞かれたたくない事だつたらしい。

「ほらつ、早くしないと、遅刻するわよ。」

少し俺の前に飛び出し、せかす時田。

「はいはい」

あの顔を俺は、気になつたが、その事には聞かず、俺達は、いつもの学び舎へと向かつて行つた。

つづく

第十一話『子犬の冒険へ走るワノコ』

学校に着き、授業開始。時田の方に目を向けると、いつも通り睡眠学習中だった。本当にアレで大丈夫なのか？

「谷、ゆ……谷、夢谷！」

「！？ どうした、ぼーとして、次、お前にこの問題を解いてみろ！」

物理教師が、黒板を指さす。

「はい、分かりました。」

立ち上がり解答を答え始める俺。

「それは、オームの法則で、電流（I） = 電圧（V） ÷ 抵抗（R）が成り立ち」「俺は、すぐ解答を出し答えた。

「完璧だ、座つていいぞ。」

はあ／ぐだらない、こんな問題いくら解いたってなんの役に立つのだか。そして、二、三、四限と終り、いつものように、アイツが俺の机の元にやって来た。

「夢谷！ 行くわよ！」

弁当を見せるながら言つ時田。

「はいはい」

俺は、購買部で買った、パンを持ち、日課になつた中庭のベンチへと、向かつた。

「「いただきます！」」

手を合わせ食べ始める、俺と時田。俺は、コンビニや、購買でいつも昼は、すますが、コイツは、毎日バリエーション豊かな手作り弁当を持ってきている。

俺達がお昼を食べている時、校舎のほうから、一人の女子生徒が、俺達の所へ歩いて来た。

歩いて来たのは、こないだ時田がせ無茶をして自殺を止めた七尾さんだった。

「ほんにちは、一人とも、いつも『』でお昼食てるわよね、仲が良いんだね」

笑顔で話しかける七尾さん。

「そんな事無いですよ、仲が良い訳じゃないです」

俺が少し皮肉ぽく、時田を見ながら言った。

「何よ、アンタそんな事言つたら、アタシが無理やり連れてきているみたいじゃない」

その通りだろー。心中でツツ「ム俺。

「ふふふ」

口に手をやり微笑する七尾さん。

「七尾さんも、元気そうで安心したわ。」

その顔見た、時田がにっこりと笑いながら言った。

「はい、お一人のおかげです、それで今日は、ちよつとお礼と言つ

か……」

七尾さんは、ポケットからあるモノを取り出し、俺達に見せた。
「どうかしら、今日、友達にいただいたんだけど、私は、明日用事
があるから、よかつたら一人で」

七尾さんは、一枚の紙を俺達に見せた。

『子犬の冒険～走るワンコ～』

「……え～と、七尾さんは一体？」

「これは、今、絶賛放映中の映画の、『子犬の冒険～走るワンコ～』
のチケットよ、明日の土曜日までしか使えないんだけど、私は、用
事があるし、よかつたら、どうかなあと思つて
いやいや、こんなの時田も興味は、無いだろ。

(ガシー)

チケットを持っている、七尾さんの手を握る、時田。その手は、

とても輝いている。

まつ眩しい……まるで玩具を『えられた子供のよつな笑顔の時田。
「アタシこれ、ちょゝ観たかつたんですよー。」

「そうなの、良かった……」

胸に手をやりほつとする、七尾さん。

「このチケットくれた友達も、友達に貰つたんだけど行けなくて、
このままだったら、せつかくのチケットが無駄になる所だったの。
きっと、その友達の友達も、友達に貰い、巡り巡って、俺達に來
たんだろうな。

「じゃあ、楽しんで来てね

そう言つと、七尾さんは、手を振つて校舎へ戻つて行つた。

つづく

第十二話　願い事の約束

校舎へ戻つて行く、七尾さんに元氣いっぱい右へ左へと左右に手を振る時田。

「ふうー明日行くわよー！」

「断る」

俺は、即答で答えた。

「何でよー…良いじやない、せつかく貰つたのに」

ベンチに座る俺の前で、受け取つた、チケットを見せる時田。

「俺は、そんなの興味が無いんだよ、誰か他の奴を連れていけば良いだろ、例えばクラスの奴とか」

「これは、アタシと、アンタが貰つたモノなのそれを興味が無いからって、他人に上げるなんて、七尾さんに失礼よ」

俺の提案を正論で返しやがる時田、まったく大人しく誰かと行けば良い物を。

「それに、この話しさは、可愛い、子犬が、一生懸命生きる内容の映画と聞くわ、アンタもこれ見て何か目標を持つて、その奇妙な感じを無くしなさいよ！」

「でもな〜〜」

俺は、顔をそむけ、人差指で頬を搔きながら、青い空に見る。

「もう、ハツキリしないわね、じゃあ、こうしましょ、明日の土曜日、一緒について来てくれたら、アンタの願いを一つ聞いてあげるわ、可能な限りね」

「！？ ホントか？」

俺は、もう一度確認のため時田に聞きなおした。

「ええ、いいわよ、七尾さん時も、アタシが一人で解決する筈が、

アンタを巻きこんで怪我までさせて、手伝って貰つたのに、何もお

礼をしてなつたからね」

俺は、コイツに頼みたい事がずっと在つた。だが、それを言いそ
びれ、今日まで来てしまつた。毎日後悔していた、だが、言えなか
つた。だから俺は、これが良い機会だと思い、時田の考えに乗つた。
「分かつた、行くよ」

「ホントー。」

「ああ、その代り、約束は、守れよな」

「モチロンー。」

そんな事を話していると、二つの間にか、昼休みの終りのチャイ
ムが中庭にも、響きわたつた。

(キーン、コーン、カーン、コーン)

「あっ、ヤバ、次、体育じやん、急ぎましょー。」

そう言つと、時田は、校舎に向かつて走り出すが、ベンチから立
ち上がり動かない俺に気づき、足を止めた。

「どうしたの？ 急がないと、遅れるわよ。」

「ああ、先に行つてくれ、どうせ、俺は、今日ジャージを忘れた
から、このままグラウンドに行くわ」

「そつ、残念ね、体育が出来ないなんて

「お前と一緒にすんなよ、俺ことつてはラッキーだ。」

「あつそう、じゅあ、アタシは、教室に行くからね」

そう言つと、時田は、校舎へと、消えて行った。

「さて、俺は、下駄箱へ行くか」

そして、俺は、少し歩き、さっきまで一人で座っていたベンチを見た。

つづく

第十四話 映画館（前書き）

短いですが、どうぞ

第十四話 映画館

そして、土曜日の朝、俺は、町の映画館前に、10時に集合となつていたので、その10分前には、着くより早く、アパートを出て、映画館へ向かつた。

休日と言つ事もあつて、映画館前には、人は、沢山居た。その中に、時田の姿も俺は見つけた。認めたくは、無いが、私服に身を包んだ時田は、予想以上に可愛かつた。

「よつ。」「よつ。

時田に近づき話しかける俺。

「あら、早いわね、まだ10分以上も余裕が在るわよ」

「俺は、待ち合わせには、遅れないんだよ」

「ふうん、じゃあ行きましょう！」

そして俺達は、映画館へと入つて行つた。

映画が始まると、食い入るように、観ている時田、俺はなんとか、観ていたがまあまあ面白い。

映画がラストに入ると、隣から、すすり声が聞こえて來た。

「わおーん！」

「良かつた、良かつた……」

俺の隣で鼻を押さえている時田の姿が、いやいや、お前、そんな涙脆いキャラじゃ無いだろ。

そして映画が終わり、出口へ向かう俺と時田。

「ずずつ、まあまあ、だったわね。」

まだハンカチで押さえている時田。

うそつけ！ だつたらそのハンカチに付いた体液は心汗とでも言
うのかコイツ。

映画館の外へ出ると、時田は、じつ切り出した。

「ちよつど、12時過ぎだし、これから、どこかでお酒でも

時田の言葉が止まり、時田が左を横切った、女の子を田で追う。
まるで、デジャブ、既視感のよつだ、そう、時田の顔は七尾さんを
見つけた時と同じ顔をしていた。

「時田？ もしかして……」

「ええ、あの女の子、自殺願望がある

「追うわよー」

「ああ、分かった。」

俺は、『今日一日』は、時田に付き合つと決めていたので、時田と
一緒に、その女の子の後を追う事にした。

つづく

第十五話 眼鏡女子

俺達は、その女の子の後を追う事にした、髪が長く、メガネをかけ、背は平均よりも少し高めの時田よりも高く、見た目的に、俺達より、少し、年上のようになに思えた。

「おい、時田、本当にあの子が、自殺しようとしているのか？」

「ええ、今すぐつて、訳じや無いみたいだけど、かなり強い、自殺願望を感じられるわ」

俺達は、その女の子に、気付かれないように、後を着けて行くと、その女の子は、近くのドラッグストアへと入つて行つた。俺達もそれに続き、ドラッグストアへ入つて行く。

「何を買つつもりだ？」

俺達が、覗いていると、女人はある商品に手をかけた。そしてそれを見た、時田が女の子の元へ歩いてこき、商品を持った手を時田が掴む。

「おっ、おいー！」

「アンタ、これで、手首でも切つて自殺するつもり？」

そう、女人が手に取つた商品は、カミソリだつた。女の子は、驚いた顔で時田の顔を見ている。

「どうして、それを……」

「やつぱり、そうなのね、アタシは、他人の自殺願望が分かるの、何が在つたか、話してくれないかしら、アタシは、アンタを助けたいの。」

その言葉を聞いた、女の子は、時田に抱きつき、涙を流した。

「ふええ～ん

俺達は、店に、迷惑をかける訳にはいかないので、近くの公園へ

と移動した。

公園のベンチに座つて貰つたこの女の子の名前は、橘 涼香（たちばな すずか）この町の女子高に通う、高校三年生だと聞いた。

俺達は、橘さんに、何故自殺をしようと思いつめたか、教えて貰つた。

それは、先週の日曜日の夜、七時過ぎ、橘さんは、友達と遊んだ帰り、電車に乗つて、自宅があるこの町の駅まで来て、駅のトイレに用を足しに行つたらしい、そして、用がすみ出で来ると、二十代前半位の男三人に囲まれ、今のトイレの中でのお前は、盗撮した、言つ通りしなければ、動画をネットにばら撒くと脅されたらしい。

そして、抵抗出来ず、駅の近くに止まつて在つた、黒いワゴン車に乗せられ、目隠しや、猿ぐつわ、手足を縛られ、何処かの部屋へ連れられ犯されてしまつたのだ。その橘さんは、解放されたが、身元も、ばれてしまい、もし、警察へ通報したら、全部ネットへ流すと脅されて、誰にも相談できず、そして……自殺に思いついたと言つ。

「許せないわね。」

「私、どうしたらいいか、もう分からなくて」

「大丈夫！ 安心して、アタシが、その男達を捕まえてやるから」

「えつ、でも、どうやって？ 犯人の居場所も分からぬのに？」

「そうだぞ、もし犯人居場所が分かつても、そのデータを何とかしなくちゃ、下手に警察を呼んだら、犯人達が怒つて、配信してしまうかも、しれないだろ」

「それは、そうだけど、橘さん、思い出すのは辛いかもしれないけど、何か他に、犯人の手がかり、になるような事って無い？」

少し、黙りこみ、橘さんが答えた。

「車に乗つて居たのは、大体、二十分位だと思うけど……あと、車から降りる1分位前に、5秒位いきなり、ガタガタつて揺れたのを覚えているわ、後、車に乗つて居る時にこんな事を言つていたわ。」

「いやあー、今日の駅は、当たりだつたな、こんな可愛い娘に当たるなんて」

「ああ、まつたくだな、日曜の夜は、最高だな」

「後、カメラには、何が写つているんだ、今日も朝から仕掛けてたんだろ」

男達は、こんな事を言つていたと、橘さんは、俺達に説明してくれた。

「成程、じゃあ犯人は、いつも、日曜日の朝の内に何処かの駅にカメラを仕掛け、そして夜に誰かを見つけては、こんな事を繰り返しているのね」

そして少し考え、時田が橘さんに言つた。

「任せて、橘さん、アタシが月曜日までに、犯人を逮捕して見せるわ」

「『アタシがアナタの自殺を止めますーー』」

つづく

第十六話 ハッキング（前書き）

読んで下せつ、ありがとうございます。

第十六話 ハッキング

それから、橘さんと話をした後、時田は、連絡先を交換して、橘さんは、公園を後にした。

「いいのか、そのまま、返しちまつて。」

「大丈夫よ、アタシ達に相談したら、大分自殺願望も小さくなつていたし、後は、その男三人組みを捕まえれば、良い訳ね。」

そう言うと、時田は、公園の出口に向かって、歩きだす。

「どうやって、捕まえる気だ、何かまた、作戦でも、あるのか？」

「ええ、恐らくまた奴らが動き出すのが、明日の日曜からだから、今日は、準備があるから、アタシは、もう帰るわね。」

「おー！」

俺は、時田を呼び止める。

「お前、一人で何とか、するつもりなのか？」

時田は、振り向き、俺に答えた。

「ええ、そうよ。誰の助けも要らない、アタシ独りで解決して見せる、こないだは、ホント悪かつたわね、巻き込んでじやつて、アンタが良い奴だったから、アタシも甘えちゃったわ……じやあ、またね。」

時田は、公園から去り、俺もアパートへ戻った。

時刻は、18時過ぎ、アパートで俺は、ベットに仰向けになり、またアイツの事を考えていた、付き合いは、短いが分かる、アイツの事だ、トンデモ無い無茶な作戦が在るんだろうな、なんせ自分の

腕を銃で撃つ奴だ。

ああ、また、言いそびれた、駄目だな俺は……『この事は』、時間が経てば経つほど、俺の心に深く突き刺さつて行く。

「自殺を止める少女か……」

「あああああクソ！　『これで、本当に最期だ！！』」

俺は、アパートを飛び出し、自転車に乗り、町の電気店へと向かい、色々な電気部品を買い、次にホームセンターで作業服と、帽子を買って、アパートへ戻つて来た。

相手は、男3人だ、俺一人で敵う訳が無い、だったら……俺は、買つてきた、電気部品などである『モノ』を作つた。

「まず、この町の駅から、車で約20分程の所に犯人の居場所が在るんだよな、時速40キロで走つたとして、13キロ程か、せめて方向が分かれれば、仕方ない、この手で行くか。」

もう時間は、午前零時を回つていた。

「さて、ここからが、勝負どころだ。」

俺は、パソコンに向かい、インターネットを開き始める。まず、警察の、Nシステムにハッキングだ。

Nシステムとは、自動車ナンバー自動読み取り装置のことと、警察が犯罪捜査に使用するものだ。

「確かに駅前周辺の国道には、大体、設置されていた筈だ。もし、これで、先週の日曜日午後7時頃に通つた黒いワゴンが見つかれば、犯人達が向かつた、大体の方向が分かる！」

そして、俺は、ハッキングを開始した。

(カタカタカタカタ、カタカタ！カタカタ！カタカタ！カタカタ)

「クソ、流石に、セキュリティが半端無いな、でも、舐めるなよ。」

俺は、夜が明け始めるころに、やつと、Nシステムのプログラム内へ侵入する事が出来た。

「ふう～次は、県、そして、市の、管理システムに侵入しないと。」

(カタカタカタカタ！ カタカタカタ！ カタカタカタ！)

そして、俺は、日曜の12時過ぎ、よつやくシステム内へ、完璧に侵入する事が出来た。

俺がこんなにも、パソコンが得意なのには理由がある、それは、もともと、パソコンのプログラマーたつだ、死んだ、父さんの影響で、友達が居ない俺にとっては、絶好の暇つぶしの道具だったからだ。

「良し！ 次は、写真を見て、探すだけだ、日曜の7時……黒のワゴン……黒のワゴン……これだ！」

先週の日曜、7時10分頃、駅から南の国道を走る、黒いワゴンを俺は見つけた。

つづく

第十七話 場所特定

俺は、システムへハッキングし、駅から南の国道を七時頃走っていた、黒いワゴン車を見つけると、今度その方角の大体の距離を計算の始めた、時速40キロで走ったとして、20分で、約13キロ、これだけじゃ、まだ、犯人の居場所は、分からぬが、俺は、七尾さんが車から、降りる1分位前に、5秒位いきなり、ガタガタつて揺れたのを覚えていたのをちゃんと覚えていた。

「これは、恐らく、道路の舗装工事をしている途中だつたんだろう、という事は、犯人の居場所は、駅から、南へ約13キロで、先週の日曜、それくらいの地域で道路舗装をしていた、場所に絞られる！」

俺は、すぐネットへアクセスし、先週の道路の工事情報を調べた。「該当する場所が、二つや三つは、あると思ったら、一つしかない、これは、付いている！」

俺は、すぐ、ネットから、地図をプリントし、電気屋で買つてきた部品で作った『あるモノ』と、ホームセンターで買つてきた、作業服と、帽子とノートパソコンをリュックに詰め、割り出したポイントへと、自転車を走らせた。

そのポイントへ俺が着いた、時は、すでに、午後5時半を回つていて、辺りは、薄暗くなり始めていた。

「この辺りだよな。」

確かに、そこは、最近舗装したばかりの形跡があり、その道路の周りには、一戸建ての家が、何件か並んでいる。

「余り、人通りの多そうな道路じや無いな」

自転車を押しながら、近くの家を調べたが、黒いワゴン車は、見つかなかつた。

「クソ！ もう、何処かへ出かけているのか…？」

俺は、その辺りを回り、黒いワゴン車が現れるのを待つことにした。それから、1時間半程経ち、辺りはもう真っ暗になつたころ、俺の目の前を黒いワゴン車が通り過ぎた、すぐ近くの家の駐車場へと入つて行つた。

「！？」

「アレだ！」

俺は、自転車をその場に置き、電柱に身を隠した。すると一人の男が車の助手席から出て來た。

辺りをキヨロキヨロ見渡す男。

「おい、今のうちだ、誰も居ない、早く運べ！」

男がそう言つと、車の中から、男一人が出てきて、手足を縛り、猿ぐつわをされ、目隠しをされた女の子を家の中に運び始めた。

「うううーーんんん！」

俺は、電柱ごしから見ていて、その女の子が、誰だかすぐに分かつた、体型、髪型、

「時田！？」

そして、時田は、男達に家の中に連れて行かれた。

つづく

第十八話 武器（前書き）

感想、アドバイス、お願いします。

第十八話 武器

「時田！…」

「何してんだ！ アイツは！」

時田は、男達に抱えられ、家の中に連れて行かれてしまった。

「クソ！ 急がないとな。」

俺は、男達が家の中に全員入ると、庭に侵入し、電話回線に、持つてきた、ノートパソコンを繋げた。

「後は、この家のパソコンにウイルスをインストールさせて、使えなくさせると。」

（カタカタカタカタカタカタ！ カタカタカタカタカタ！）

「Enter！」

俺は、インストールを終えると今度は、持つてきた、作業着と、帽子をかぶり、玄関へ行きインターほんを鳴らした。少しと経つと、男の声が玄関のドアの向こうから聞こえて来た。

「何の用だ？」

「はい、〇〇電力会社の者なんですが、この周辺の電圧が一時的に、上がつてしまつて、その調整をする為にブレーカーを見せて貰いたいのですが」

俺は、こうウソをついた。

「いや、俺の所は、いい

「ですが、このままにして置くと、こちらのお宅が停電してしまう恐れがありますので、ほんの、五分程の点検で終わりますので」

「……」

男は、少し黙り考えているようだ。

「ちょっと待つてろ」

男の足を音が、玄関から、離れて行く、どうやら仲間に連絡にしに行つたみたいだ。

そして、男がもう一度玄関に帰つて来て、玄関を開ける。

「たくつ、これからつて時に、早く終わらせろ」

俺は、男がドアを開けた瞬間、ハンカチで、口を塞ぎ、電気屋で買つてきた部品で作つた、『スタンガン』を男に押し当てる。

「ぐがつ！」

男の声が少し漏れたが、ハンカチで押さえて居たので、他の一人には、聞こえなかつた。俺はその男を庭の端へと引きづり連れて行つた。

「おい！ そんなに電圧は、上げて無いから、氣絶してないだろ、他の男と二人と、女の子はどこに居る？」

俺は、スタンガンを男の顎に近づけ、男に聞く。

「ひつ！」

男は、まだ体が痺れて動けない。

「これは、電圧を調整出来るから、人一人くらい、簡単に殺せるぞ！」

俺は、さらにスタンガンを男に近づけも男を斬した。

「分かつた、言う、他の二人と、あの娘は、玄関を入れつて一番奥の右の部屋に居る」

「何か、凶器は、持つているのか？」

「ひつ、一人は、ナイフを持っている」

「嘘じや無いだろうな。」

「ああー……」
「ぬいが……じやあ、寝てね。」

「ぬいが……じやあ、寝てね。」

「えつ？」

(パッチー)

「うつ」

「うつ」

俺は、電圧を上げスタンガンを押し当たし、馬を絶命した。

「よし、行くか！」

ヘリ

第十九話 武者震い

俺は、玄関からそつと、入り、さつき男に聞き出した、一番奥の右の部屋へ音を立てないようにして向かつて行つた。

おれは、襖を開け、そつと、中の様子をうかがつた。

「おい、早く、やつちまおうぜ。」

「もう少し、待つてろ、その電力会社の奴帰るまで。」

「ううーん！ううー！」

時田は、目隠しは取られていたが、両手両足を縛られ、猿ぐつわをされて、床に転がっていた。俺は、警察を呼べば、それに気付き、時田を人質に取られる可能性があるので、警察には、まだ連絡は、していなかつた。

さて、どうするか、一気に攻めこんでも、相手は、一人だ、スタンガンを持つているとはいえ1人は、ナイフを持っているらしいから、分が悪いな。

まず、どうにかして、あの二人の注意をそらして、その隙に時田の奴を助け出さないと。

そして、俺は、先ほど、玄関に積まれてあつた、雑誌の束を思い出した。恐らく、ごみを出すためにまとめて合つた、モノだろう、そして、俺は、それを利用する事を考えた。

俺は、玄関にあつた、雑誌の束にスタンガンの電流で火を付け、そして、すぐ、玄関近くの部屋へと隠れた。

そして、燃えている、雑誌の匂いと、煙に気付いた、男二人が、慌てて、玄関に走つて來た。

「おい！ 何か燃えてんぞ！？ 水だ！ 水！－」

「ああ、分かつてゐるよ！」

そして、俺は、男達が玄関の火に氣を取られている内に、時田の居る部屋へと急いだ。

「うめふあに！（夢谷…）」

「し！ 静かにしろ。」

俺は、時田の猿ぐつわと、手足のロープを外した。

「ふはあ！ 夢谷！ どうしてここに居るのよ！？」

「それは、俺のセリフだ！ 何してんだ！ お前は、まあ良い説明は、後だ、早く窓から、逃げるぞ。」

「分かったわ。」

そして、時田が、窓から、家の外に出た所で、男一人が、部屋に戻つて来てしまった。

「おい！ テメー、一体何してやがんだ！」

「ちつ！ 時田、お前は、早く逃げて、警察に連絡しろ！」

「おい！ ちよつと待てよ、お前らいつの間にか警察なんかに連絡して？」

眼鏡をかけている男が、部屋に在った、パソコンを触り、俺達に話しかける。

「どう言つ意味よ！？」

「このパソコンには、今まで、俺達がやつてきた、女の子の動画や画像が沢山ある、そして、俺は、それをすぐにネットにアップ出来るんだぜ、そうなつたら、何人の女の子の人生が滅茶苦茶になるとと思う？」

男は、不気味に笑いながら、俺と時田に言った。

「くつ 卑怯よ、アンタら！」

「時田！ 気にするな、早く警察に連絡しろ。」

「でも、どうすんのよ、ネットに流れたら、それにアンタは……」
俺は、振り向き、窓の向こうの、時田にこいつ言った。

「心配すんなよ、俺に任せろ、早く行け。」

「……分かつたわ、すぐ呼んでくるわ。」

そして、時田は、外へと走って行った。

「やつぱり、自分の安全の為には、他人は、関係無いって事か？」

「バカだろお前ら、俺が、お前らがやりそうな事を、考えもしないで、ここまで来たと思っているのか？」

「はあ？ どう言つ意味だ！？」

「この家には、パソコンが一台あるみたいだが、さつき、電話回線から、ハッキングして、ウイルスを入れて、使えない様にして置いた。」

「はあ！？ そんなバカな。」

(カタカタカタカタカタカタ！)

男は、キーボードを叩ぐが、パソコンは、反応しない。

「クソ！全く反応しねえ！」

「おい！どうすんだよ、これから。」

もう一人の体の大きな男が、キーボードを叩いている、眼鏡をかけている男に聞く。

「これから、どうなる？ 決まっているだろ、強要罪、略取・誘拐罪、逮捕監禁罪、集団強姦罪で、お前ら3人は、刑務所行きだ。」

「チイ！ クソ！ 全部、お前のせいだ。」

「ああ、こうなりや、警察が来る前に、お前をぶつ殺しいやん。」
「そ言うと、眼鏡をかけている男が俺にナイフを向ける。

「殺人罪もそこに、加えるつもりか？」

「お前、さつきから、随分余裕そうな顔しているが、嘘だろ、足が震えてるぜ。」

確かに、俺の足は、震えている、そりやそうだ、スタガンを持っているとはいって、2対1でナイフまで、向けられてんだぜ、本当は、こつちは、心臓バクバクで汗だくなんだ、隙を見せない様に、平気な顔をするのが、やつとなんだよ。

「これは武者ふるいだよ、ちゃんとコッチには、勝算があるからな。」

（バチバチ！ バチバチ！）

俺は、スタガンを相手に向けた。

つづく

第一十話 顔に滴る何か

「これは武者ぶるいだよ、ちゃんとコッチには、勝算があるからな。

「バチバチ！ バチバチ！」

と言い、スタンガンを相手に向けた、俺だったが、勝算なんてモノは、無かつた。

俺と男達は、少しの間睨み合い、先に仕掛けて来たのは、相手の方だった。

「死ね、このクソガキ！」

体の大きい男が、部屋に在った、椅子を俺に、振り下ろしてきた！（ビックュ！）

俺は、その場にしゃがみこみ、椅子を避け、椅子は、俺の髪をかすつて行つた。

（危ねえ！ あんなの食らつたら、ひとたまりもないぞ！）

俺は、椅子を避け、すぐ男の間合いを詰め、スタンガンを押し当てた。

（バチバチバチ！）

「ぐあああーーーー！」

（パタン！）

その場に倒れ込む男。

（良し、後、一人だ！）

俺が、もう一人の眼鏡をかけた男の方を、振り向こうとした時、眼鏡をかけた男は、俺の右手を蹴飛ばし、俺はスタンガンを手放してしまつた。

（ドカ！）

「痛つ！」

（カラカラカラカラ）

スタンガンは、床に落ち転がる。

「死ね——！」

そして、男は、俺の脇腹にナイフを突き刺した。

(ケサ!)

「アーリー!?」

俺の脇腹に刺さったナイフから
血が滴り 床に落ちる

「<<」

男は、狂ったように笑い、俺の脇腹から、ナイフを抜いた。

「ガハッ！」

(バタン!)

俺は、その場に倒れこんだ。

「ははは、警察は、まだ来ないみたいだな。さて、痛いたる？」

そう言うと、男は、ナイフを持ちかえ、しゃがみ込み、俺の頭上に構えた。

(ヤバイ、やばい、やバイ、ヤバイ、ヤバイ、死ぬ、死ぬ、死ぬ)

体は、動かない、床は、血で赤く染まって、徐々に意識が遠のいていく。

「よくも、俺達の楽しみを滅茶苦茶にしてくれたな……死ね——

L

「 もちろんか――――――！」

(バチバチバチバチ！！)

男が、ナイフを振り下ろそうとした時、部屋に戻つて来た、時田が、俺の落とした、スタンガンを拾つて、男に突きつけた。

「...せせせせせせ」

男は、感電して気絶し、俺は、間一髪のところで助かつた。

「アンタ大丈夫！　もうすぐ警察と救急車が来るわ！」

俺の傷口を押さえ、話しかける時田。

「痛っ！ 何で、お前戻つて来ただよ？ 逃げろって言つたら？」

「アンタが心配に、決まつてるからじゃ無い！」

霞む、意識の中、俺の顔に、何かが、垂れて来た。
だから、嫌なんだよ……もう『つくらない』って、決めたのに。
ここで、俺の意識は、途絶えた。

つづく

第一十一話 病室

「ううん

俺は、目覚ますと、知らないベッドに横たわっていた。ひして、その隣には、椅子に座っている時田の姿が在った。

「あつ！ 夢谷、目が覚めた？」

安心した顔で、俺に話しかける時田だったが、その顔は、疲れているようにも見えた。俺は、体を起こした、まだ傷口は、痛む。

「痛つ、じじは、どこだ？ 今は、何日だ？」

「じじは、〇〇病院の個室の部屋よ、それで今日は、月曜の夕方よ、アンタ、まる一日位、寝てたんだから。」

「そうか。」

俺は、窓の外を少し眺めた、暮れかかっていた赤い空を見ながら、俺は、頭の中を整理し、時田に気になつている事質問をした。

まず、時田が、何故あの男達に捕まつて居たかと聞くと、あの日曜日、時田は、朝から、この地域の駅のトイレを、回つて、盗撮のカメラが、あるかを探したらしい。そして、こないだ、橘さんが盗撮され、男達に捕まつた、隣の駅で、カメラを見つけ、夜になるまで待ち。自分が囮にならうと考えたのだ。

「お前、男達に連れ去られた後、どうするつもりだつたんだよ？」

「ああ、それは、コレをあいつ等の家に置いて来るつもりだつたから。」

時田は、ポケットから、小さな黒い機械のようなモノを取り出し俺に見せた。

「これは……発信器か？」

「そっ、これを仕掛けて置いて、後から、アタシを解放してから、あの家を特定するつもりだったの、そこへアンタが来たのよ。」

「じゃあ、お前は、犯されるの覚悟で、あいつ等に捕まつたのか！」

？

時田は、俺に背を向け答えた。

「そうよ。」

そして、病室のドアへと歩いて行く。

「さうそろ、面会時間も終わりだから、アタシ行くわね。」

「ちよっと待てよー 時田ー！」

時田は、足を止めたが、俺には、背を向けたままだった。

「どうして、お前は、そこまで自分を犠牲にしてまで、他人を助けようとするんだ？」

「言つたわよね、アタシには、目標があるって、その為には、アタシは、どうなつたて良いのよ、明日、学校が終わつたらまた来るわね。」

「あと、あいがとう……」

「ガタンー！」

そして、時田は、病室から出て行つた。

つづく

第一十一話 僕の願い

次の日の火曜日、午前中に、俺の病室には、話を聞きたいと言った。警察の人�이가来て、午後は、橘さんが花を持って、俺を見舞に来てくれた。何度もお礼を言われ、俺は、まいったが、時田にも、お礼を言つといてくれと言つた。もしかしたら、あいつが、橘さんを見つけなければ、大変な事になつていたかもしれない。

それから、橘さんが、帰つた後、俺は、病室を抜けだし、屋上へと向かつた。まだ傷口は、痛むが歩けない程では、無かつた。

屋上は、誰も居なく、ガーデニングやベンチなども置かれていた。俺が屋上へ来た理由は、学校がもうすぐ終わり、時田が病院に来るからだ。俺は、時田に言わないといけない事が在るのに、それを避けようとして、会わない様に、屋上へ逃げて來た自分が腹立たしかつた。

「何してんだ、俺は、ちゃんとアイツに言わなきゃいけないんだろ？」
決めただろ俺には

（ガタツ）

ドアが開いた音に気付き、振り向くと、そこには、時田の姿が在つた。

「どうして、俺がここに居ると分かつたんだ？」

「なんとなくね、それより怪我人がなに出歩いているてんのよ！
さつさと、病室に戻るわよ。」

そう言つと、時田は、俺の元に歩いて来て、俺の腕を掴もうとしたが、俺は、その手を振り払つた。

「！？」

「……触るな。」

「どうしたの？」

「お前、言つたよな、こなこだの土曜日映画はさき合つたら、何か俺の願いを聞いてやるって。」

「ええ、言つたけど。」

「もつ
俺は、屋上のアドベンチャーハウスへ歩いて行く。

（言つんだ、言わなきゃ、またあんな思いをする事になる……）
「もう、俺に、構わないでくれ。」

「ちよっと、それどうこうの意味よー。」

時田が駆け寄つて来て、俺の肩に掴もつしたが、俺は、手、その手を放つた。

「！？」

「田代わりなんだよ、お前は……」

時田、驚いた顔でその場立ち去りながら走っていた、そして俺は、時田を置いて屋上を後にした。

ヘリ

第一二三話 黒猫、子猫

そして、俺は、金曜日に病院を退院する事が出来、月曜日には、学校へ行く事へした。当たり前だか、あの屋上で時田にあんな事を言つてから、時田は、病院には、来なかつた。

俺は、朝の身支度を終え、アパートの階段を降りて行くと、今日も、大家さんが、アパートの前を掃除して居た。

「おはよつじでこます。」

「あら、夢谷君、もう体は、良いの？」

「ええ、おかげ様で、まだ多少痛みますが、大丈夫です。」

「今日は、可憐ちゃんは、まだ来てないけど、珍しいわね。」

「もう、来る事は、無いですよ。」

俺は、大家さんにそつと学校に向かつた。

学校でも、時田は、俺には、話しかけたりはしなかつた、その変な空氣に気づき、女子が、時田の所に集まっていた。聞きたくはなかつたが、机で寝た振りをしている、俺の耳に話声が聞こえて來た。

「可憐ちゃん、夢谷君と何かあつたの？」

「えつ！？ 別に何も無いわよ。」

「でも、変だよ、いつもは、夢谷君と、あんなに仲良が良いのに、今日は、一回も話してないじゃない。」

「ホントに、なんでも無いって、あつー アタシ先生に頼まれ」と

されてるんだった。」

(がらつー)

さう言つと、時田は、教室から出て行つた。

昼休みも、俺は、独りで昼食を食べ、今日一日、誰とも話す事無く、学校を後にした。

そう、これが『普通』の俺なのだ、中学は、ずっとこんな生活をしていた。これが俺の求めた、答えただった。

そんな、生活が一週間程続いた、五月下旬、俺は、雨が降る中、傘を差しながら学校から、帰る途中、道路の端に朝には、無かつた、段ボールが、置かれて居る事に気がついた。

(ザザ)

「何だ、コレ？ 俺が段ボールを覗き込むと、そこには、雨に濡れて震えている一匹の真っ黒な子猫が居た。

「こやー、こやー。」

(ザーザーザー)

雨の音が子猫の小さな鳴き声さえも書き消すよう、鳴り響く。自分でも、良く分からぬが俺は、自分の持っていた傘段ボールに被せ、その場を後にした。

「何してんだうな、俺は。」

ずぶ濡れになりながら俺は、そのままアパートに向かって歩いて行くと、後ろから、走ってくる足音に気が付き振り向くと、そこには、俺の傘と、わいつきの猫を抱きかかえて、息を切らす、時田の姿があった。

「はあ、はあ、はあは、はあ、はあ。」

「とつ、時田……」

「アンタは、良い奴よ、やつぱり放つておけない！ 何でそこまで、

他人と距離を作るの！？

「何だよ、俺には、もう構うなって　」

「黙つて聞いて！！」

「俺の言葉を遮つて、時田が叫ぶ。

「アタシ、言ったわよね、アンタには、自殺願望に似た感覚が感じられるつて、その感じはね徐々に消えてたのよ、それなのに、ここ二週間でアンタのその感覚は、初めて逢つた以上に大きくなってるの…自分では、分かっているんでしょ何が原因か！？」

（ザーザーザーザー）

俺は、時田に、今まで、誰にも言つてこなかつた『ルール』を明かした。

「俺は……五歳の時に病氣で母さんを亡くした、そして、小四の時に父さんを事故で亡くし、小六の時にも、親友を事故で亡くしたんだ……そして、俺は気づいたんだ、大切な人が居ると、また那人を失つた時俺は、辛い思いをする、だつたら最初から、もう大切な人は、要らない、友達も要らない、目標も無いし、世界に期待したりしない、俺は、独りで生きて行くつてそう決めたんだ、それなのにお前が、俺の前に現れて、俺の中に入つて来て、俺を惑わすんだ！だから……俺には、もう構わないでくれよ、俺は、独りが良いんだ！」

「嘘よ。アンタが独りを望んでいる筈は無いわ、独りを望んで、アンタが幸せなら、アタシは、すぐにでもアンタの前から消えてあげる。」

左手に持つた傘を投げ捨て、俺に近づいて来る時田。そして俺の目の前に来ると、右手で猫を持ち、残つた左手を使って、俺の胸ぐらを掴んだ。

「失うのが怖い？ いつか、消えて無くなるから、大切に思えるの

よ、誰だつていつか死ぬわ……でも、その時まで、アンタが楽しく生きれるなら、それで良いじゃない。」

手を話し、俺の胸に、頭を置く時田。

「アンタは、ホント良い奴よ、アタシが保障するわ、例え、アタシがし 消えたつて、独りにならない様にも、もつと友達作ろつよ。」

「お前が、最初の友達になつてくれるか?」

「ええ、モチロン。」

「いやー、いやー、いやー。」

その日の晩は、やけにじょひみかつた。

つづく

俺は、ベッドで寝ていると、何やら顔に生温かいモノが当たつて
いる事に気づき目を開けた。

「うん、なんだ?」

そこには、俺の、頬を舐めている、一匹の黒猫が居た。

「わっ!?」

「あつ
『ムー』か。」

そう、ロイツの名前は、『ムー』。昨日、道に捨てられていたの黒い子猫だ。

あの後、俺のアパートに来た、時田は、仲の良くなつた大家さんと、交渉し、特別に俺の部屋でムーを飼つて良い事にしてもらつた。そして、俺が、ムーに猫用のミルクをやつていると、アパートの階段を駆け上がる足音が聞こえて來た。

「アーティスト...」

俺のアパートの玄関のドアを開け、困り気よい良く、俺の部屋に上がり込み、ムーを抱く時田。まあ、ムーの名付け親でもある。ちなみに、夢谷の夢の字からとつてムーになった。

!

笑顔で俺に言う時田。

「おはよじやねえよ、ノック位して入つてこいよ。

「いいから、いいから。」

その後、時田が、ムーと構つてゐる間に俺は、朝の支度を済ませ

た。

「じゃあ、学校へ行つてくるから、おとなしくしていろんだぞ。」

「にゃー」

俺は、ムーの頭を撫でて、部屋を後にし、アパートの階段を降りて行く途中、時田が携帯を忘れたと言つて、俺の部屋に戻った。

俺と時田は、今、学校へ向かいながら、話をしていく。

「いい、夢谷！ アンタ、今日からは、ちゃんとクラスの人とも仲良くなつて、友達になんのよ…」

「でもなあ～今まで、随分友達を作つてなかつたから、上手く行く自信が無いな。」「

「心配しなくても、大丈夫よ、アタシにちやんと、考えがあるから。」

「

「へーそつか、そいつは、頼もしいなあ～（棒読み）」
（コイツの考えは、いつも凄いからな、ホントに大丈夫か？）

そして学校に着き、俺は、初めて、教室に入りながら、あいさつをしよう思つていた。

「みんな、おはよー！…」

時田のあいさつが終わつた後おれも…

「おひ、おはよ……」

教室に居た、クラスメイトの視線が俺に集中する。そりやそうだ、今まで、クラスになじんでいなかつた奴が、いきなり挨拶をしたら、不思議に思うに決まつていた。

（やつぱり、そんな急に友達なんて、できないかな……）

俺は、その後、トイレに行き戻つてくると、机の上に置いてあつた、リュックが少し動いたことに気付いた。

「？」

俺は、リュックを開けると、そこには、アパートに置いて来た箸の『ムー』が居た。

「ここやー。」

「ムー！ 何でこんな所に……あっ、ときたーー！」

近くに居た、クラスメイトが、ムーの鳴き声を聞いて、俺の机に集まつて来た。

「あっ、夢谷君、その猫どうしたの？ カわいーー！」

「えっあ、ちよっと、昨日拾つて、間違つて連れてきちゃつて……」

「ちよっと、抱かせて、貰つてもいい？」

「どうで拾つたの。」

「夢谷君、猫好きなの？」

「夢谷、お前、学校に、猫連れてきちゃ駄目だろ。」

次々、話しかけられる俺。時田の方を見ると、そんな俺を見てアイツは、笑っていた。

「なんだ、夢谷って、ただの、なんか暗い奴かと、思つてたら、お前、結構面白い奴だな。」

「ねーねー。この子名前なんて言つの。」

俺は、今まで、話した事無い奴とも、話す事が出来た。

(きつかけがあれば、こんなに話せるモノなんだな。)

その日俺は、ムーが見つかり担任に怒られたが、クラスのみんなと、少しづつだが打ち解けることが出来た。

第一十五話 ベッ、別にアンタの為に作ってきたんじゃないだからねー（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第一一十五話 ベーベー、別にアンタの為に作ってきたんじゃないだからねー。

今は、6月の頭。曇り空のじめじめした空氣がたちこむ今日この頃。今日も俺は、時田と一緒に登校していた。

「あ～はつきりしない天氣ね～」

「しかたないだろ、こないだ梅雨入りしたばかりなんだから」「そんな、何氣ない会話をしていると、登校途中にあるコンビニの前にせしかかった。

「時田、ちょっと、待っててくれ、俺、昼飯買つてくるから」そう言つて、コンビニに向かおうとしたが、そんな俺を時田が引きとめた。

「今日は、買つて来なくていいわよ」

「えつ、なんでだよ?」

「いいから、早く学校へ行くわよー。」

そう言いわれ、俺は、腕を引っ張られ、コンビニを後にしてしまった。

そして、昼休み。いつものように、中庭のベンチに座る俺と、時田。

「はい」

時田は、俺にお弁当を差し出した。

「えつ、コレを俺に?」

「そうよー。別にアンタの為に作つて来たんじゃないんだからねー。少し、笑いながら、言つ時田。

(この顔は、絶対何か裏がある)

「何、いらないの？」

「いや、ちゃんと、いただくよ」

俺は、時田から弁当を受け取り、蓋を開けると、中には、いろいろ豊かなおかずが入つていて、とても美味しそうだった。

「おっ、美味そうだな、ホント、お前は性格の割に、いつものはマメだな」

「それほどで　それって、褒めてんの？　馬鹿にしてんの？」

「褒めが、48・7%　馬鹿が、51・3%ってどこだな」

俺がそんな冗談を言つと、時田がポケットからあるモノを取り出し、俺の口に入れる。

「夢たに～お弁当と、鉛玉、どっちが好き？」

俺の口に拳銃を入れて、笑顔で聞く、時田。

「ふえんとう、ふえんどう（弁当、弁当）」

「よろしい！」

俺の口から、銃を出した。

「時田、それ、偽モンだよな……」

「さあーね」

そう言って、時田は、銃を閉まつた。
(コイツ、本物持つてるからな、後で、この銃後で調べて置こう)

「じゃあ、改めて、いただきます」

久々の他人の手料理は、冷たい箸の弁当に温かみが感じられ、時田の弁当は、予想以上に美味しかつた。

「予想以上に、美味しいな」

「そお、ありがと」

少し赤くなつて、照れている時田。

「アンタが食べたいなら、これから毎日作って来て上げても良いわよ」

「ホントかー!? ジャあお願ひするよ」

「ただし、条件付きでね」

「条件?」

「何だよ、条件って」

俺が、時田にさう聞くと、時田は、立ち上がつて、自信ありげに
こう言った。

「次の時間になれば分かるわー!」

それ以上条件の事を聞いても、教えて貰えず、この休みは、終わ
った。

つづく

第一十六話 学生の本分（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第一十六話 学生の本分

時田と、お昼を食べ終わった、次の時間、数学。こないだやつた、五十点満点の小テストが返された。

クラスメイトに数学の教師が、テストを返し終り、教卓の前で話しを始めた。

「みんな、分かっていると思うが、明日の土日を挟んで、丹曜日には、高校に入つての初めての、中間テストだ、くれぐれも赤点など取らないように。ウチの学校は、赤点を取つたら、課題と、追試をして貰う事になっている。まあ、小テストの平均が三十点を超えているので、数学ほとんどの者が大丈夫だと、思うが、心配のある者は、数学に限らず、この土日でしっかり復習しておくよつこ、分かつたな。」

「このクラスでこの小テストで満点を取つたのは、夢谷だけだ。みんなも、夢谷を見習つて勉強しろよ」

「　　おお～～」

クラスの視線が、俺に集中した、最近は、クラスのみんなとも話しこそするようになつてきただが、こつこつ場面で、名前を出されるのは、やめてもらいたい。

そして、数学が終わつた次の時間の休み時間、時田が俺の席に来た。

「夢谷、やるじゃない、満点なんて」

「別に、まぐれだよ」

俺は、軽く言つて、時田に聞いた。

「お前は、何点だったんだよ？」

「えつ！」

表情を曇らせる時田。

「ははーん、さては、平均よりも大分低かったんだな、いつも寝てばかりこるからだよ、で、何点だ、一二十点位か？」

時田、俺から、田を逸らしながら、小さな声で言った。

「　点」

「えつ？ なんだって？」

「だから、七点だってー。」

(七点？ 七点って、7点だよな、単純に百点満点で計算すると四十点……)の学校の赤点は、四十点だから、残り、一十六点足らない、しかもこれは数学だけで、他の教科は一体どうなっているんだ？)

俺は、時田の肩に優しく手を置き、笑顔でこう言った。

「来年は、お前後輩だな」

時田は、肩に置いた俺の手を払いのける。

「冗談言つてる、場合じゃないのよー。だからアンタに勉強を教えて貰いたいのー！」

「お前、さつきの弁当の条件つて」

「そうよ、アンタがアタシに勉強を教えるのが、条件よ。言つとくけど、アンタに拒否権は、無いから、さつき、お弁当食べたでしょ、アレも報酬に入ってるんだからー。」

(そりゃ、別にアンタの為に作つて来たんじゃないんだからねーつてそういう意味だったのか)

「マジで、ヤバいかり、今日から、アンタの家で、教えてもらひつか
らね！」

「仕方ない、付き合いつか

つづく

第一十七話 勉強会（前書き）

感想、アドバイス、お願いします。

第一十七話 勉強会

そして、放課後、学校が終わってから時田は、自分のアパートへ戻り、必要な物を取つて来ると言つて、アパートに帰り。俺は、時田が来るまでに、部屋掃除をしていた。

しばらく経つて、階段を上がる音が、聞こえて来た。
(タツタツタツタタ!)

「来たな」

「ムー、夢谷、お待たせ!」

勢い良く、ドアを開ける時田。

(ガチャヤ!)

「アレ?」

ドアには俺があらかじめチェーンを掛けっていて時田は、ドアを少ししか開ける事が出来なかつた。

(ガチャガチャガチャ!)

「ちょっと、夢谷、コレ外しなさいよ」

俺は、ドアの前に立ち、時田に話し始めた。

「時田、友達の家に来た時は、いきなり、ドアを開けない。来たらまずインターホンだ」

「仕方ないわね~」

時田は、ポケットから銃を取り出すと、チェーンに銃口を当てる。

「撃ち抜いていい?」

笑顔で聞く時田。

「ふざけんなお前! 分かつた、分かつた、開けるから待つてろ」

俺は、仕方なく、ドアを開けた。

「たく、お前は、ホントにやりかねないからな」

「ムー！ 相変わらず、良い毛並みしてゐるわね」

「こやー」

部屋に入つたとたん、ムーに抱きついたが、俺ムーを取り上げた。
「はい、アニマルタイムは、終了だ、お前の実力が知りたいから、
ちょっと、コレやって見ろ」

俺は、去年の中間テストの用紙を時田に渡した。

「コレどうしたの？」

「クラスの塾に通つてゐる奴から貰つたんだ、塾で対策として貰つ
たから俺が、出来の悪い奴の勉強を教えてやらないといけないと、
愚痴ついていたらコピーしてくれた」

「へえ～アンタも結構、クラスになじんできたわね」

「まあな」

「じゃあ見せてあげるわ！ アタシの実力を！」

用紙を受け取り、テーブルに向かう時田。

（数時間後）

（きゅつ、きゅつ）

五教科全ての丸付けが終わつた。

「ふうっ

「どうだつた？」

俺は、立ち上がり、雨が降り出した、梅雨空を見て言つた。

「来年、一年に上がる時は、三十九人か、寂しくなるな……」

「どう言ひ意味よそれつてー！」

「決まつてんだろ！ 数学21点 現国34点 英語28点 世界史31点 物理22点だぞ！ これでどうやって進級するつもりだよ。」

「仕方ないでしょ！ アタシ最初の一週間入院してたんだから、学校行つたら授業が全く分からなかつたのよ……だから」

「だから？」

「睡眠学習に励んで……」

下を向いてちゅちゅくなる時田。

「たく、だつたら、こんな間際になつて言わないで、もつと早くから、言えれば良いモノを」

「だつて……」

「まあ、土日をじつかりやれば、赤点回避位は、何とかなるだろ？」「

「ホントー？ ああ、じゃあ、もつ今日は、八時を回つてゐし、今日の所は、帰つてまた明日」

「俺の話しう遮つて、時田が言つてきた。

「えつ？ アタシ今日は、帰らないわよ」

「へい

第一一十八話『とんかつ』（前書き）

時田可憐 「べつ、別にお気に入り、登録されたいなんて思つてないんだらね！」

夢谷信哉 「そんなシンナーイヤウド！」まだ読んでくださった読者様が落ちるとでも思つてこるのか？」

可憐 「向よ、夢谷、じゅあ、アンタ良いアイディアでもあると言つの？」

信哉 「モチロンだ、まず、お前が、服を脱いでヒロトークでもすれば、きっとこれを読んで下さつてこる読者様は、お気に入り登録どころか、小説の評価もして下さることがいな

「バン！…」

信哉 「なんじゅうじゅああああああぐはつ

「ばた！」

可憐 「オホン… それじゅ、皆様、本編をどうぞ…」

（注意、コレは、本編のファイクションです）

第一一十八話『とんかつ』

「えつ？ アタシ今日は、帰らなこわよ」

「はあ？」

困惑する俺、今日は帰らない？ 待て待て、言つてこる意味が良く分からぬいだ。

「だつて、今日帰つて、また明日来るのもめんじへそこ、そしたらずつとムーと一緒に居られるしね。」

そう言つて、ムーを抱く時田。ムーそこで猫パンチをかましつくれても良いぞ。もし出来ないと言つなら、俺が今度直々に伝授してやる。

「まあ、お腹も空いて來たし、アンタには、結構世話になつてるから、晩御飯は、アタシが作るわ」

そう言つと、時田は、ムーを置いて、台所へと歩いて行く。

「おこおこ、ちよつと、待てよ、若い男女が、一緒に部屋で寝泊まりなんて、青少年として、余り良くないじゃないか！」

「別に良じやない、アンタ、アタシに何かするつもじなの？」

「なつ！？ 別にそんな訳ないだろ！」

俺は、顔を赤くして時田に言つてしまふ。時田は、そんな俺を見て少し笑っている。

「じゃ、良じわね、決まり！」

俺には、時田を止める術など、持ち合わせてなどになかった。

「じゃあ、冷蔵庫の中を見てもいいかしりつ？」

冷蔵庫をまるで、自分家のモノのよう、当たり前に開ける時田。

「どーぞ」

俺は少し呆れ氣味に答えた。

「え～と、豚肉と、キャベツ、卵……みじー。今日は『とんかつ』にするわね！ 異論は？」

「無い」

そして、今日は、晩飯は、『とんかつ』に決まり、時田の作ったサクサク、ジューシーな『とんかつ』を俺は、味わって食べた。

「はあ～美味かったよ」

食べ終わつた、俺と時田は、食器を流しへ持つて行つている。「はあ～揚げ物作つたら、汗が凄いわね、この後、お風呂借りて良いかしらっ。」

「ああ、良いよ、俺はちょっと、コンビニへ行つて来る」

「何を買つてくるの？」

「漫画雑誌」

そして、洗い物が、終わると、俺は、アパートから、少し離れた、コンビニへ向かおうと思い、玄関を出たが、アパートの階段を降りた所で、財布を部屋に忘れている事に気付いた。

「あつ、仕方ない、戻るか

(がつた！)

階段を上がり玄関を開けたその時！ 俺の瞳に映つたモノは……上から、柔らかそうな胸の膨らみに、キュッとくびれた、お腹周り、そして小さく桃のようなお尻。

「あつーーー！」

「…………」「…………」

この間約一秒は、在つたと思つ。一人とも、頭の中での情報処理に手間取つた。

「すいません、間違えました……」

俺は静かにドアを閉めた。

「…せせせせせせせせせせ」

ドアの向こうから、時田の悲鳴が聞こえて来る。

俺が、ドアの前で、しゃがみ込み、そんな事を考えていると、服を着た時田が出てきて、俺の襟を掴んで、部屋に引き摺りこんだ。

はたん()
ドアの閉まる音が辺りに空しく響いた。

七
九

第一十九話　『メンチ』（前書き）

可憐 「第一回質問コーナー！　はい、アタシがアンタの自殺を止めます！！　ヒロイン事、時田可憐が今回の司会を担当させていただきます。それでは質問の方に移ります。こないだ、この小説を作者の、あひるさんの友達に見せた所、「夢谷信哉つてハツキングまで出来るつてハイスペックすぎじゃないかと言わされましたが、そんとこ、どうなんですか？　夢谷さん？」

夢谷 「はあ～、分かつてないな、学年トップクラスの頭を持つている、友達の居ない男が、パソコンにはまり出したら、いつの間にか凄腕ハッカーになつてもなんら不思議じやないだろ？」

可憐 「え～と、ぼつち時代が生み出した、この時代の脅威。それが、夢谷さんな訳ですね？」

信哉 「人を犯罪予備軍みたいに言つな」

可憐 「だつて、人の個人情報とか一発で調べられそつじやないですか」

信哉 「それは、俺が悪いんじやない、個人情報が無数に在るネットがいけないんだ」

可憐 「責任転換ですね、どうせ、夢谷さんは、厨二病をこじらせ「あれ？　俺、ハツキング出来んじやね」とか思つてそんなスクリ身に着けちゃつたんじや無いんですか？」

信哉 「ドキ！　ち、ちがうぞ、そんなんじやないぞ！　え～と今

田の魔門「一ノ瀬」は「おまえ、さあ、西様、本編へござい。」

第一十九話　『メンチ』

今の状況は、そう最悪という言葉が一番ふさわしい。部屋に引き摺りこまれた俺は、部屋の中心で正座をし、その前には、仁王立ちしてこちらを睨んでいる、とても怖い魔物がいる。きっと、コイツが地獄へ行つたならば、サタン直属の部下になれる。それくらいの迫力が今のコイツには在る。

今のコイツのメンチならマフィアでさえ道を開けるぞ！

「何か言う事は…」

喜怒哀楽で言つと、怒が100%の声質で、俺の鼓膜を揺らす時田。

「えつとですね、コンビニへ行つと思つて、アパートの階段を降りていたのですが、財布を忘れてしまい、部屋に戻つてきたら、可憐さんが……」

時田の耳にやつと届く位の声の大きさで俺は言った。部屋に居たムーを見ると首をかしげてゐる。何をしているのかなこの一人は？ とでも思つてゐるよう元氣じられる。今までに猫の手も借りたい、ムー助けてくれ！！

「ふうん、で…！」

鋭い視線で、俺を睨む時田。今なら、蛇に睨まれたカエルの気持ちが十二分に分かる。

まつ、まずい、この状況をどう回避する…？ そうだ！ 下手に出ないでもつと

俺は、立ち上がり時田にこう言つた。

「時田だつて、風呂に入ったばかりの筈だろ、何で裸で部屋に居たんだよ！」

弱気になつたら、もうバッジエンジニアリングしか残されてないと考え、強気の作戦に俺は出た。

「うつ、それは、脱衣所に着替えを持って行くのを忘れたから、そ

れを取りに行つた時に、アンタが帰つておひやつたのよー。」

「だつたら、お前にも、落ちが在つた事だ　」

「ん？」

俺は、時田と話している途中、ある場所に視線が行つてしまつた
……時田も俺の視線に気づき、視線を追つ。

俺が気づいてしまつたモノそれは、Tシャツに浮かんだ、二つの
突起だつた。

「「あ……」「

ふつ、ここの戦い、無傷で終わりそつも無いな…… ああ、終わった。

「あやあああ！！！ ここのバカ、変態！ わたせと『ゴンゲー』へ行つて
来い！！！」

(ドカー)

「ぐあ！ 痛ててて

俺は、時田に蹴飛ばされ、玄関の外に追い出された。

「ちくしょう、ついてねえ！ 確かに、俺も悪かつたと思つが、や
り過ぎだろ……」

俺は、体を起こし、階段を降りて行くと、大家のおばさんが、雨
空を見上げていた。

「こばんは」

俺は、挨拶をしながら、ぺこりと頭を下げた。

「あひ、夢谷君、ここんばんは、今日は、可憐ちゃんが來てるの？
わつき元気な声が聞こえて來たけど」

「ええ、そつなんですけど、ちゅうと、怒らせひやこまして」

俺は、少し苦笑いをしながら、大家さんに言った。

「そう、そんな時は、女の子には、プレゼントなんかをやると良いわよ、そう言うのに女の子は弱いから」

大家さんは、優しい声で俺に言った。

「でも、俺、そんなお金持つて無いですし」

「いいのよ、値段なんて、気持ちがこもった物なら、きっと可憐ち
ゃんも喜ぶわよ」

さすが俺より、何倍も生きている事だけあって、その言葉には妙
な説得力が感じられた。

「そうですかね」

「やつや」

「分かりました、少し考えてみます、ありがとうございます」
俺は大家さんこそう言つて、傘を差しアパートを後にした。

へづく

第三十話 クレーンゲーム

アパートを出た俺だったが、コンビニには向かわず、とりあえず、この町の繁華街のほうへ向かった。

「うーん、時田が喜びそうなモノか、難しいな」

歩きながら、考える俺。女の子にプレゼントなんて考えてみれば、生まれてから、15年経つがそんなイベントは、一度も無かつたので、俺は頭を抱えていた。

「モデルガンとかエアガン、ガスガンが喜びそうだけど、却下だな、俺の命が危険にさらされる可能性が在る、他に思いつくのが、ミリタリー系の雑誌？ いや駄目だ、アイツの犯罪行為に拍車をかけてしまう。となると……」

俺は、ゲームセンターの前で、あるモノを思いついた。

「そうだ！ 紐いぐるみだ！ アイツは、何気に動物好きだから、何か、動物のぬいぐるみの景品があれば」

俺は、ゲームセンターの中へ入り、中を見渡した、すると、クレーンゲームで白色と黒色の丸い猫のぬいぐるみを見つけた。

「これだ！」

（一十分後）

俺は、大きな袋を抱え、ズぶ濡れになりながら、アパートへ向かっていた。そして、俺は、アパートの自分の部屋のドアに立つと、一応、インターホンを鳴らした。自分の家にインターホンを鳴らすのは少し不思議な気分だ。

「ちょっと、夢谷、コンビニへ行くって言つてた割に、遅かつたじやない」

ドアを開けながら、話す時田。

「！？ ちょっと、びしょ濡れじやない、それにその大きな袋は何？」

俺のびしょ濡れの格好に驚く時田。確かに俺は、傘を持って行つたが、ぬいぐるみを濡らさないようにする為に犠牲を払つた結果、こうなつた。

「ああ、コレか、お前にプレゼントだよ」
俺は、部屋に入つて、袋から、大きな黒い猫のぬいぐるみを取り出し、時田に渡した。

「あつ可愛いーでも、アタシに？ 何で？」
「ぬいぐるみを抱きながら、笑顔で聞く時田。
「さつきの詫びだ、これで、勘弁してくれ」

「まあ、アンタがそこまで言つなり、許してあげるわ

ぬいぐるみグッジョブ！ 俺の目に狂いは無かつたな。

心の中でガツツポーズをする俺。

「じゃあ、俺は、風呂に入るわ、ずぶ濡れだし」

「そう、行つてらつしゃい、アタシは、ムーと遊んでいるわ

「ニヤー

そして、俺が、脱衣所に入ると、俺は、あるモノを見つけてしまつた。

それは、脱衣籠に入った、水色のブラや、白と水色の縞パンが……

「はうつ

「時田——！」

俺は、慌てて、脱衣所のドアを開け、時田に言つた。あつとこの時の俺の顔は、情けないが真つ赤になつていたことだひだ。「自宅じゃないんだから、アレ何とかしろよー」

俺は、顔を赤くして、脱衣籠を指さす。

「あつ、きやああああー」

「たく」

その後、俺は、風呂から出て時田と、会話をしていると、時田の携帯が鳴った。

「あつメールだ」

「あれ？ その着つたって」

「そ、アンタがいつも聞いてるバンドの曲よ、アタシも気にいったから、メールも電話も全部『コレ』にしたの」

その後も、会話を続けた、俺だつたが、一つ重大な事に気付いた。「お前、今日どこで寝んの？ おれの部屋見ての通り、ベッド一つしかないけど」

「あつ……布団とかないの？」

「独り暮らしで、友達も、こないだまで、居なかつた俺に、余分な布団があると思つか？」

「仕方ないわね、じやあ」

「そして、就寝。」

何故こうなつた？ 俺は今、時田と同じベッドで、寝ている。俺は顔を壁側にして、時田に背を向けてこの妙な空氣に堪えていた。

「ねえ、夢谷」

「うん？」

「アンタの目にアタシは、どう映つてる？」

「無鉄砲で、お人よしなバカ、かな」

「それ、褒めてるの？ 馬鹿にしてるの？」

「褒めが82・7% 馬鹿が17・3%つてどこかな」

「すーすーすーすー」

話している内に時田は、寝てしまった。

「寝付きの良い奴だな」

そして、しばらくすると、時田の寝言が、聞こえてきた。

「あいか……あいか……『めんね、ごめんね……』

俺は、「コイツの事をほとんど知らない、何故、こんな能力を持っているのか、何故、自分を犠牲にしてまで、他人を助けようとするのか、家族は？ 中学の頃は？ 考えれば考えるほど疑問が浮かんでくるが、まだ『それ』を俺が聞くのは、早い気がしたし、少し怖かった。そんな事を考えている内に俺も、いつの間にか、寝てしまっていた。

つづく

第三十一話 結果発表

中間テストが終わった数日後、テストを返された時田は、意氣揚々俺の机に向かつてきた。

「で、どうだつたんだ？」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれた、見よ、アタシの実力を」
漫画やアニメの中ボスのようなセリフを吐く時田。

（バツー）

俺の机に並べられる、五枚の答案用紙。

「どれどれ

「数学48点 現国57点 物理50点 英語51点 世界史55

点……」

「どう、凄いでしょ！ 余裕で、平均五十点行つたわよ」

時田は、自信ありげな表情で、俺に行つてくる。

「へえ～そุดだな～、最初に比べたら、凄く進歩したじやないか（棒読み）」

金土日とあれだけ、勉強を教えて、この点数が……ひょっと悲しくなるな。

「アンタは、どうだつたの？」

「俺？ 僕は、普通だよ」

「ちゅうど、見せなさいよ」

そう言つと、俺が机の中にしまつた、答案用紙を時田は、引っ張り出しあがつた。

「よつとー、どれどれ えつー？」

俺の答案を見て、驚いた顔をしている。俺はその様子を頬杖をして見ている。

「どうした？」

「数学100点 現国98点 物理100点 英語99点 世界史99点。合計えーと、496点これがどこが普通なのよ…」

(バン!)

今、現代に『メンコ』が流行つていれば、俺の見た手じゃ、全国大会に出場出来る勢いで、俺の机に答案用紙を叩きつける時田。まったく、時代はエコだぞ、限りある資源を大切にしろよな。

「中学の時もそんなもんだつたから、俺にとつては普通なんだよ」

そんな、ハイテンションの時田を軽くあしらひ。

「そう言えば、アンタ、中学の時学年で、一番にもなった事あるのよね」

「ああ、一回だけな」

「毎回こんな点数取つてるんじゃ、もつと一番になつた事があつてもおかしく無いじゃないの?」

「俺の中学には、俺と同じクラスで、全国模試で一位になつた事もある奴がいたから、俺はいつも一番だったんだよ、俺が一番になつた事があるのは、そいつが、欠席でテストを受けなかつた、一回だけだ」

「ふ〜ん、でも、高校じゃ、この点数だと、一番を狙えるんじゃない?」

「無理だな」

「えつ、どうして？」

驚いた顔で聞く時田。

「だつて、ソイツ、この学校に居るからな」

（三日後）

学校の廊下に、こないだの中間テストの上位30位のクラスと名前が貼り出され、俺は、時田に連れられ、それを見に来ていた。

「どれどれ」

貼り出された、プリントを見る時田。

「3番480点、山田大貴　　2番496点、夢谷信哉……1番5

00点！？　えっと、いじゅういん？　？？」

「伊集院 優琉だ」

俺は、読めなくて困っていた、時田に1番の名前を教えてやった。「すぐるつて読むのか～アンタ良く読めるわね」

「ソイツが、俺と同じ中学で、全国模試で1位になつた事がある奴だよ、それにしても、また満点か、相変わらず、すげえ～な」

「上には、上が居るつて事よ、アンタも自分の力を過信しちゃダメよ」

「お前が言つ事か！」

（バシ！）

「痛たつ！」

俺は、軽く、時田の頭をチョップする。

「お前も、これからは、ちゃんと授業受けろよ、分からなーいとは、教えてやるから」

「わかったわよ～」

頭を押さえながら、返事する時田だった。

つづく

第三十一話 夏休み！

あつ、暑い。まるでサウナだ。汗で服が体にまとわりつき気持ち悪い。地球温暖化が進んでいるらしいが、こいつ蒸し暑いと、地球熱帯化にでも、変えた方が良いじゃないだろうか。

中間テストが終わってから何事も無く時は過ぎ、今日は、一学期の終業式、つまり明日から、夏休みだ。今、俺は、体育館にクラスごと整列させられ、校長のつまらない演説を右から左へと受け流している所だ。窓を開けても、今日の最高気温は34℃、そして、この体育館に数百人も詰め込まれては、さすがにまいる、早く帰つて、クーラーの利かせた部屋で寝たいものだ。

「 であるから、夏休みだからと言つて、羽を外しそぎないよつ、勉学に勤しんで下さい」

「 校長先生、ありがとうございました。次は、生活指導の、竹沢先生の話です」

次は、竹沢の話しか、さつさと、終りにしてくれ。

「えー最近、この町で、違法な薬物が多く出回っています。この学校では、まだ捕まった者は、居ないが、この町の者、特に学生が、去年を大きく上回るペースで検挙されている、君達は、甘い誘惑をされても、絶対にそんなモノに手を出さないよつ、注意して貰いたい。

以上だ」

ふうん、薬物が出回っているか、そんなモノに手を出すなら、俺はパソコンのバージョンを上げるソフトに手を出したい。

そして、放課後。今日学校は、終業式という事もあって午前中で終わり、俺は、いつものように、時田と一緒に、下校している。

「ねえ、お毎もまだ食べて無いし、どうかでごはん食べてかない？」

時田が、歩きながら、提案する。

「ああ、別に良いけど、何、食つんだ？　俺は何だつていいぞ」
さすがに、このクソ暑いのにラーメンとかは、勘弁だがな。

「そうね～」

人差し指を口当て、上田づかいで考えている時田。

「じゃあ、あそこにしましよう！」

俺と時田は、初めて逢った日に行つた喫茶店に行く事にした。

（喫茶店）

メニュー表に田を通す俺。

「へえ～、ここって、ランチとか普通に飯もやつ正在中のんだな」

「ええ、ファミレス程、種類は無いけど、ここの中の料理は、おいしいわよ」

そして店員が、俺達のテーブルに注文を聞きにやつて来た。

「アタシは、サンドイッチと、『ーンスープ』

「じゃあ、俺は、オムライスで」

「かしこまりました」

そして、十分程経つて、俺達のテーブルに頼んだモノが運ばれてきて、俺と時田は、食事を始めた。

「もう、一学期も終わりか、なんだかんだで早かつたな」

俺は、オムライスを食べながら、何気なく時田に話しかける。

「そうね、確かに、アンタと初めて逢つた日も此処に来たわよね？」

「ああ、俺にとって、一生忘れる事の出来な衝撃的な一日だったよ

俺は、少し、からかう感じで、時田に言う。

「そうよね、自殺願望が分かる人に逢うなんて、そりや衝撃的よね
いやいや、違うだろ、俺が衝撃的だと言っているのは、お前との
出会い方だよ！ いきなり口に初対面の奴に、銃を突っ込まれたん
だぞ俺は！」

「ありがとうございました」

「ふう～、お腹いっぱい、おいしかったわね」

喫茶店を出て、お腹を押さえながら満足げな表情をする時田。

「ああ、そうだな」

「」の後どうする？」「

俺は、携帯を開き時間を確認した。

「さうだな～時間もまだあるし、駅の近くの繁華街でも行くか？」

「そうね、そうしましょ」

そして、俺達は、繁華街へと向かった。

第三十三 ヘッジショッター（前書き）

時田可憐「感想、アドバイス、待つていろわよー。」

第三十三 ベビードショットー

繁華街に着き、その辺をぶらつく俺と時田。周りを見渡すと、今日で学校が終りなところも多いのか、制服を着た学生や、私服を着た若者などで賑わっている。まあ、俺達もその中の一人と言う事になるだろ？。

「ねえ。夢谷、あそこに行きましょう！？」

時田の指さす先に目を向けると、そこには、それなりに大きなゲームセンターが在る。

「ああ、行くか」

ゲームセンターの中に入ると、冷房が俺の汗を止めてくれる。耳には、ゲームセンター特有のBGMが鳴り響く。他にも制服を着た学生や、私服を着た若者で賑わっていた、やっぱり、ゲームセンターは、こうでないとな。

店内を見て回っていると、時田が、中間テスト前に、プレゼントした、白色と黒の色の猫のぬいぐるみが入っているクレーンゲームを見つけた。

「前に、アンタから、黒色は、貰ったから、今日は、白を狙うわよ」
そう言つと、時田は、意氣揚々、二百円をゲーム機の中へ投入。
「行くわよ！」

一回目

(ウイーン)

「ああ～全然ダメ、もう一回ー。」

二回目

(ウイーン)

「ああ～～

三回目

(ウイーン)

「あ～……

四回田

(ウイーン)

「あ……」

五回田

(ウイーン)

「……」

「何で取れないのよ！ アーム弱いんじゃいのーー！」
取れない奴の七割は、機械の所為にするよ。

「どれ、かしてみろ」

俺は、熱くなっている、時田をどかし、一円田を機械に投入した。

「まず、狙っているぬいぐるみを見て、距離と奥行きを把握し」

(ウイーン)

「今度は、ぬいぐるみの重心を考え、クレーンを降ろす場所を決める。これでいいんだよ」

(ガター！)

「ホラ」

俺は、出て来た、ぬいぐるみを時田に手を渡す。

「……」

ぬいぐるみを見て少し沈黙する時田。

「どうした？」

「悪いけど。もう一回、アタシ黒は、持っているから、白が欲しいの」

「はいはい、わかったよ」

俺は、もう一度、クレーンゲームをやり、今度はちゃんと白のぬいぐるみを時田に渡した。

「はあ～最初から、アンタに頼めば良かつたな～」

渡した、ぬいぐるみを袋を持ちながら愚痴をこぼす時田。一応、奢つてやつたんだから、愚痴をこぼす前にお礼の一つ位は欲しい。「何で、アンタ、簡単に取れるなら、アタシが五回も、失敗しているとこを黙つて見てたのよ?」

「いや～ムキになつてゐる、お前が面白くてな
俺は、少しからかう様に時田に言つた。

「じゃあ、今度は、アレをやつましょー! アレなら、アンタに負ける気しないわ」

時田がそう言いながら自信ありげに指をさす。何だかんだで、俺はゲーム得意な方だ。

「お前にゲームで負ける気がしないんだが
俺が時田の指を差し方を振り向くと、そこには、拳銃を使ったシユーティングゲームが。

「そうきたか……かつ勝てる気がしねえ!
「じゃあ、さっそくやりましょー!」

時田は、すでに拳銃を握つて戦闘態勢だ。何か様になつてゐる。下手な警察官に銃を持たすよりもコイツに持たした方がきっと様になつてゐる。こんな女子高生が居ていいのか? いやね居ない方が良いに決まつてゐる。

「やっぱり、本物と比べると重量感が足りないわね
いやいや、本物の重量感知つている奴、そう居ないからな。
俺達が今やろうとしているゲームは、画面にゾンビが出てきて、二人プレイの場合は、どっちがより多くのゾンビを倒したかを競うゲームだ。

「じゃあ、始めるわよ!」

「ああ」

「スタート!」

「ううあああ…」

次々画面に、ゾンビが出て来る。俺は結構ゾンビに弾を当てているが、時田の方を少し見て見ると、時田の撃った、弾は、ゾンビの頭を一発で撃ち抜いて、ヘッドショットを決める。どんな女子高生だコイツは。

普通女子高生でこんな事が出来るなら、ギャップ萌えなんてモノを感じているのかもしれないが、コイツからは、そんなモノは、微塵み感じられない。

そして、数分後、俺は大差をつけられ負けた。

「ふうつ まだまだね、夢谷…」

銃口を軽く吹いてポーズを取る時田。

「くそ～ 時田に負けると凄いショックだ……」

時田に遭つてから三ヶ月以上経つがこれ程の挫折を時田に味わされたのは、初めてだ。そして、この後、ゲーム画面に一位から十位までのランキングが出て来て、俺は、無意識に田を通した。

「うわ、すげーなコレ、一位から十位まで全部同じ名前だぜ」

画面を見て、俺は驚きながら、時田に言った。

「あつ、ホントだ」

時田も画面を見て驚いた顔をしている。

「なになに、SIGERU? シゲル？」

何処かで聞いた事がある気がするな……

俺がそんな事を考えていると、このゲーム機の近くから何かがぶつかるような音が聞こえて来た。
(ドスウンーーー)

「「ー?」」

第三十四話 シゲル登場

(ドオンー)

俺と時田が、音のした方を見ると、そこに、俺達と同じ位の歳の私服を着た、少しオタクぽい奴が、制服を着た、絵に描いたような不良五人に絡まれ、壁際に詰め寄られていた。オタクぽい奴の頭の右側には、背の高い男が壁に手のひらを当てている、どうやら、さつきの音は、この男が壁に手をついた音みたいだ。

「おい、ちょっと君、俺達に少し、お金を貸してくれないかな」

「へへへへ」

男達は、オタクぽい奴を囮んでいる、どうやら、カツアゲをしたいらしい。こんな俺にも多少なりの正義感は、在るが相手は、不良五人だ、どうあがいても俺に敵う相手では無い。

「ひい、すいません、でも僕、そんなお金持つて無いですし……」

「ああん？ いいから、あるだけ、出せよー」

不良の決まり文句のようなセリフを吐くと、不良の一人が、オタクぽい奴の胸ぐらに掴みかかる。

「ぐつ！」

「あいつら～」

それを見ていた時田が、その男達五人の方に歩こうとする。

「おい、時田！」

俺が、時田を引きとめようとした、その時、俺よりも少し背の高い制服を着た男が横を通り、時田の肩を（ぽん）と叩いた。

「可憐さん、ここは、俺に任せて下さい」

笑顔で時田に話しかける、俺は自分でも記憶力は良い方だと思つてはいるが、コイツの顔は、俺のメモリーには存在しない。

「シゲル！？」

時田は、そいつの顔を見てそう言った。

シゲル？…

そして、そのシゲルと言う奴は、男達の元に歩いて行き、胸ぐらを掴んでいる男の腕を躊躇無く掴んだ。

「何だ、お前は！？」

腕を掴まれた男が、シゲルと言う奴を睨みながら言い放つた。

「やめろよ、みつともない」

シゲルは、男五人に囲まれている状況の中、全く動搖せず、冷静な口調で男に言う。

「お前には、関係ないだろ引っこんでろ！！！」

胸ぐらを掴んでいる、男が、シゲルに叫ぶ。

「もう一度だけ言う、やめろ」

確かに、冷静な口調だが今度の、シゲルと言う奴の声には、もうこれで最後だと叫ぶ、忠告のようなモノを感じられた。

「ゴチャゴチャウルセエーンだよ！！！」

囲んでいた、五人の中の一人がシゲルに向かって、殴りかかって行つた。

「ちつ、仕方ないな……」

(ビュッ)

「え？」

(ドガー！…)

「ぐあっ！…」

それは、一瞬だった、殴りに行つた男の顎にシゲル蹴りが炸裂し、男は少し宙を舞い、床に倒れる。俺は、格闘技は好きでは無いが、なんとなくテレビて見た事は、何回か在る。しかしそのテレビで見た蹴りよりもシゲルの蹴りの方テレビとリアルを差し引いても、が俺の目には迫力を感じられた。

「なっ？！」

不良達は、驚いて、少し間倒れた奴を見て、固まっている。それ

はそうだ、殴りにかかつて行つた奴が一撃でＫＯされれば、誰だつて、驚くに決まつてゐる。

「何しゃがんだテメー」

不良達は、まだ数では、勝つてゐる、それをきつと武器にして、シゲルを睨みつける。

「この町で、勝手な事は、俺が許さない 文句があるならかかつて来い！」

まるで、テレビのヒーローのようなセリフを男達に言い放ち、体を構え、完全に戦闘態勢に移るシゲル。

「上等だ、コラ一、ナメンな！」

その言葉を聞き、一斉に、シゲルに飛びかかる男達。

(スッ)

シゲルは、まず一人目の男の懷に飛び込み、右拳で、右から左へと男の顎を殴りつけた。

「あつ？！？」

その男は、人間は、顎に衝撃を食らうと脳震盪を起します。恐らくその男も脳震盪を起こしたらしく、その場に倒れ込む。

「このヤロー！」

次に、目の前に居た男が、シゲルに向かつて、拳をシゲルの顔面目がけ、繰り出すが、シゲルは、これを右に避け、ソイツの左脇腹に向かつて、ボディープローを決める。

「ぐはつ」「ぐはつ」

男は、相当痛かつたらしく、脇腹を押えその場にしゃがみ込む。他の男が今度は、シゲル蹴りを繰り出すが、シゲルは、これを腕でガードし、ソイツ目がけ腹にパンチを撃つ。

「がはつ」

そして、最期の一人は、シゲルの後から、パンチをしてこよつとしたが、シゲルはその腕を掴み、ソイツを一本背負いした。

「ドォン！」

まるで、映画のアクションシーンの一部のようだった。そして、その場に立っているのは、シゲルと、絡まれていた、オタクぽい奴になつた。

「大丈夫か？」

オタクぽい奴に、優しく話しかけるシゲル。

「あつ　はい！　ありがとうございます」

「うん、じゃあ、もう行つていいく」

「本当にありがとうございました」

オタクぽい奴は、一回も深ぶかと頭を下げ、シゲルに礼を言い、その場から、去つて行つた。アイツにとつては、地獄に仏だつただろつ。

「何だ、アイツは？　男五人をこうもあつさつと……」

時田に聞こえるように言ひ、何故なら時田と「マイツはま、ビツやら知り合ひのようだと感じたからだ。

「相変わらず、凄いわね～」

少し笑い、腕を組みながら言つ時田。

「相変わらず？　やつぱりお前の知り合いか？」

「そうよ

俺達が話していると、シゲルが俺と時田の方に歩いて來た。

「どうも、可憐さん」

後頭部を右手で押されて、少し照れながら向かつてくるシゲル。

「前よりも、強くなつたんじや　」

「おー！」

その時だった、シゲルが倒した男一人が立ち上がり、ナイフを取り出し、シゲルに向かつて走つて來た。

「うおおお！　このヤロー！」

「シゲル！」

それに気付いた時田は、ポケットから銃を取り出し男に向けて構えた、バカかコイツ撃つ気なのか！？

「おい！ 時田！？」

（パン！！）

俺が止める間もなく、ゲームセンターの色々なゲーム機の音の中に乾いた音が響いた。

（カラーン、カラーン）

そして、俺が、男を見ると、ナイフが手から離れ、足が少し宙を浮き、そして、その場に倒れ込んだ。

つづく

第三十五話 黒くて長い車

「ドカ！」

時田に撃たれ、その場に倒れ込む、男、時田と持っている銃の銃口からは少し煙が出て空氣中に漂っていた、火薬の匂いが俺の鼻を刺激する。間違い無くコイツが撃つたのだ。

「…………」

俺は、時田の顔を見る。店内は、冷房が利いて涼しい筈が、暑さとは違う、嫌な汗が、全身から吹き出す。

「ん？」

まるで、何でアンタそんな慌てた顔をしているの？ 時田の顔は、そんな顔をしている。

「何してんだよ！ 何撃ってんだよ？ お前、殺人犯になりたいのか！？」

俺は、時田の胸ぐらを掴みを前へ、後ろへと時田の体を揺する。「ちょっと、落ち着きなさいよ、夢た」「

手のひらを前に出して、半笑いしながら、言う時田。

「この状況をどう落ち着けつて言うんだよ…… ああ最悪だ…… 明日の朝刊の見出しへ、『女子高生、ゲーセンで発砲』だ……」

俺はしゃがみ込み、頭を抱えている。

「だから、落ち着きなさいって、コレ、ゴム弾だから、ゴム弾」
時田が、マガジンから、一つ弾を取り出し俺に指でつまみ見せながら言った。

「えつ？」

俺が取り乱している間にシゲルが、倒れた男の元へ行き、顔に手を当てている。

「大丈夫、気絶してるだけですよ」

「ほらね」

笑顔で言う時田。まったく、ゴム弾なんか持つているなら、そりゃ言つてくれれば良いモノを。

「何だよ！ びっくりさせるなよ！」

俺達が話していると、倒れていた男達の方に向かって、シゲルが歩いて行き、そして、男達を見降ろしている。まるで、京都の金剛力士像のような迫力だ。

「ひいい」

「おい」

男達に気迫のこもった声で話しかけるシゲル。

「はい！」

弱々しい返事をする、不良。最初の、威勢は、今となつては欠片も残つてはいない。

「二度と、カツアゲなんて、するなよ、今日は、これで見逃してやるから、その、のびてる奴を連れて、さっさと帰れ！」

親指で、時田に撃たれた奴をさし、言うシゲル

「わつ、分かりました！」

そして、男達は、ゲームセンターを逃げるように立ち去つて行った。

「すいません、可憐さん、助けていただいて」

申し訳なさそうに、手を頭にやり少し下げるシゲル。立場的、このシゲルと言う奴は、時の下に位置するらしい。まあ、どんな奴なら「ゴイツの上に位置出来るかは、俺の頭のデータに該当する奴は居ない。

「まだまだ、甘いわよ」

「はい！」

そんな話をしている、二人に俺は割つて入り言った。

「とりあえず、話しば、他でしようぜ、周り見て見ろよ

周りは、やつらの戦いと、時田の発砲でギャラリーが結構増えていた。

「やうですね、じゃあ、もし良ければ、これから家に来ませんか？」

「ここの駄菓子は、俺がどうにかするので」

「いいけど、アタシ達、歩きよ、シゲルん家、こっから結構遠いでしょ？」

「大丈夫です、すぐ、迎えを呼ぶんで」

俺達は、歩きながら、ゲームセンターの出口に向かい、その時シゲルは、携帯を使って連絡をしていた。

「ああ、俺だ、ゲームセンター側にも謝つておいてくれ、悪いけど、すぐ頼むよ、」

ゲームセンターを出ると、暑い空気が俺達を襲う、ゲームセンターとは、凄い気温の違いだ。

「暑いわね～」

「すぐ、迎えが来ますんで」

時田に丁寧に話しかける、シゲル。俺は、その時、前にシゲルといふ名前に、聞き覚えがあつたような気がしてそれを思い出そうとしていた。

「何やつてんのアンタ」

額に手を当てる俺に聞く時田。

「ああ、ちょっとな」

シゲルの事を俺は何処かで聞いた事がある、そんな感覚が頭から離れないが、何故か思い出そうとするが、背筋がビクつとなつた。

（それから数分後）

「あっ、来たみたいですね」

シゲルの視線の先に在る車を見た時、俺はコイツの事を思い出した。

「リムジンー？」

「へえ～りむじんって言つんだあの黒くて長い車」

思い出したぞ、コイツ、あれだ！ 七尾さんの時に、時田が電車や救急車をもみ消す様に電話で頼んでた奴だ。

「じゃあ、お一人は、それで向かって下さい。俺は、バイクなので」

そう言うと、シゲルは、バイクにまたがり、先に走り出した。

(パタン)

元気良く、リムジンのドアを開ける時田。

「あ、ああ」

「いつ、嫌な予感しかしない！」

つづく

第二十六話 あいさつ運動。

今の状況を説明しよう。目の前に在るシゲルが呼んだ、黒くて長い車リムジン。本物を見るのは、初めてだ。そして、シゲルは、電車を止めてもその事実を揉み消せる力のある人物である事。その事から察するにシゲルは……とても金持ちで色々な所に顔が利く、そんな奴だ、俺は、自分にそう言い聞かせた。もう一つ、別の予想が最初に頭をよぎったが、あえて考えないようとした。

「どうしたの夢谷、早く行くわよ」

時田がリムジンの後部座席のドアを右手で開け、左手で俺の手を引っ張つている。

「あっ、ああ

トーンの低い返事を返し、俺は、ゆっくりとリムジンへと乗り込んだ。

「じゃあ、シゲルの家まで、ヨロシク頼むわね！」

「はい、かしこまりました」

運転席に居る男に、まるで、友達との会話のような感じで言った時田。本来は、ここでもっと他人行儀をしろとかを思つたりするのだが、今、俺は、それどころではない。

そして、俺達を乗せ、車を発進させる運転手、実に良いハンドルをばきだ。だが、今注目すべき点は、そんな所では無い。

・運転手スペック

年齢 二十代中盤～三十歳位に見える。

服装 黒服

アイテム サングラス

特徴 左頬に切り傷

装備 左ポケットに、妙な膨らみ。俺の予想だと、遠距離武器

の可能性大

この情報から導かれる答えは

俺が頭で脳内サミットを開いている途中に、運転手が俺の視線に気づいたのか、

「何か、私に御用ですか？」

「いえ、別になんでもありませんよ…」

はつきり言いつと、なんでも無い訳がない。

「夢谷、どうしたの？ 涙い汗かいてるけど」

車の中は、涼しい筈なのに、俺は、時田にも変に思われる位に、汗をかいていた。

「ああ、何でも無い……」

そして、二十分程車に揺らされて、車は、大きな、和風の屋敷へと入つて居た。

俺は、此処には、来た事が無い。だが、此処は、知つている場所だ。この町で十年以上も住んでいるだ知らない方がおかしい。俺の頭の中で、幾つかの点が繋がつた。何故、女子高生のコイツがトカラフや盗聴器などのブツを持っていたのか、何処から調達していたのか。

車から、降りると、十人程の黒服を着た、男達が出てきて、二列に並び、俺達を出迎えてくれた。人生でこんな丁寧なもてなしを受けたのは、初めてだか、全くもって嬉しくは無い。

「いらっしゃいませ！！ 可憐さん！ そしてお連れの方」

丁寧な礼をし、元気な低い声でいさつをする。こないだ朝学校でやつていた、あいさつ運動をしていた体育教師なんか目じやない迫力だ。あいさつとは、威嚇と言つ意味だったのか、そう感じてしまう程怖い。

「時田」

「何？」

「シゲル君の本名を教えてくれないか？」

俺は、平常心を装つて、言つているが、頭の中では、この場から、逃げ出したい気持ちでいっぱいだ。

「ああ、まだ言つて無かつたわね、黒崎茂だけど」

はは、やつぱりそうか……この町には、昔からある『やくざの組』が存在する。此処はその本拠地だ、この町に住んでいて、知らない奴は、ほとんど居ないだろう。

そう、その組の名は……黒崎組

つづく

第三十七話 冷茶

俺が一列に並んだ、男達を見て、立ちすくんでいると、ガレージ
らしき建物から、シゲルが、歩いて来た。

「もひ、みんなは、行つて良いよ、この人達は、俺のお密さんだか
ら」

「はい！ 分かりました、シゲルさん」

そう、威勢の良い返事をした、男達は、和風の屋敷の中へと戻つ
て行つた。

「じゃあ、俺達も行きましょ！」

きつとコイツは、この黒崎組の跡取りだろ？ だが、俺には腑に
落ちない点があつた、何故コイツは、さつきゲームセンターでオタ
クぽい奴を助けたのか？ やくざの息子ならあんな奴は、放つてお
くもんじやないのか？ そして、俺が一番今、気になつているのは、
シゲルと時田の関係についてだ、さつきの会話からすれば、シゲル
は、時田よりも立場は下だ。一体時田、お前は、何者なんだ？

シゲルに案内され、屋敷の中へと入る俺と時田。長い廊下を歩いて
行つた奥の右の引き戸の部屋へと、案内された。

部屋は、畳の部屋で、そこまで広くは無く、八畳無い位か、部屋
には、机、タンス、テーブル、本棚などがある。本棚には、漫画な
どが置いてある、此処はどうやら、シゲルの部屋みたいだ。

「どうぞ座つて下さい」

シゲルがテーブルの周りに座布団を用意し、俺と時田が座つた後、
シゲルも座つた。

(コンコン)

「失礼します」

誰かが、引き戸を叩く音がしたら、子供の女の子の高い声がし、
引き戸が開くと、そこには、お盆でお茶とお茶菓子を持っている、

小学高学年位？　の可愛らしき女の子が、なんとなくシゲルに似ている。

「可憐なことあの……」

「ああ、夢谷よ」

「ありがとうございます。可憐さん、夢谷さん、どうぞお茶です」時田は、以外に洞察力がある、今、この子が俺の事を何て呼べばいいか困っていたのをすぐに分かった。普段からこれくらい、俺にも気がきけば良いのにな。

ゆつくつと、テーブルに、コップに入った冷茶を三つ並べる、女の子。

「静紀ちゃん、ありがとうございます」

時田 そう女子に親しげに礼を言った。どうやら、この女子とも知り合いのようだ。時田は、相当喉が渇いてたのか、いただいた、冷茶を一気に飲み干した。

「ふは～生き返るわ～、あ、静紀ちゃん、トイレ何処だっけ？」
一 気に飲んだら、急に生きたくなつたやつた

「あつはい、じつちです」

女の子は時田をトイレに案内する為連れて行き、部屋には、俺とシゲルの二人だけとなつた。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3033y/>

アタシがアンタの自殺を止めます！！

2011年11月29日17時52分発行